アイルーライフ

かものはし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイルーライフ

【Ｎコード】
Ｎ７０８４Ｖ

【作者名】
かものはし

【あらすじ】
モンハンの小説です。
処女作な上に思い立って勢いで書いてます。
なので、設定がおかしかったり文がおかしかったりします。
不定期更新。
しかも予告なしに改訂とかしてます。
それでもいいよ！という方はどうぞ読んでってくださいな。

業務連絡：練り直しなんてなかった！

プロローグ（前書き）

今回はモンハンの主役、モンスターの軽い説明です。
誤字脱字、おかしな部分がありましたら感想でもメッセージでもいいので送ってください。

プロローグ

この世界にはモンスターと呼ばれる存在がいる。
それはイノシシであったり鳥であったり猿であったりトカゲであったりと、実に多様であるが、総じて人間よりも強い存在である。

モンスターの傾向として、進化の元となった生物よりもはるかに大きく、生命力が高くて俊敏で力が強い、さらに強いものは長く生きるので成長してどんどん大きくなる。
別に小さいものでも腕の一薙ぎで木はへし折れるし勢いのついた体当たりにあたろうものなら人間くらいなら吹っ飛ぶので、大きくなくても脅威であることに変わりはない。

そんなモンスターの中で特に厄介だと言われているのが、所謂「竜」と呼ばれる存在である。
竜はモンスターの特性のほかにさらに特別なものを持つ。
竜は鱗を持ち、その鱗は生半可な刃物なら傷がつかないほどの硬さと、かなりの衝撃を吸収する柔軟さを兼ね備え、さらに生え変わりもそこそこ早く、時を重ねるごとに鱗も重なりより強くなっていく。
また、体内に他の生き物にはない特殊な器官を持っていることが多く、火や毒、はたまた電気などを飛ばしてきたりもする。

これだけでも十分恐ろしいのに、この上彼らの中には翼を持ち、空を飛ぶものまで存在する。
あらゆる生き物が持つ死角である頭上からの攻撃ができる、だけではなく、地形や植生に影響されない「飛ぶ」という移動法は地を駆ける生き物とは比べ物にならない速度での移動を可能にしている。

そんなわけでこの世界はモンスターに支配されており、モンスター以外の生き物は細々と生き永らえる生活をしている、わけではなかった。

モンスターが支配するこの世界で、そのモンスターに対抗し、時には利用して生活している生き物も、ごくわずかな種類ながらいるのである。

これから始まるのは、そんなモンスターに支配される世界で生まれ落ち、モンスターに対抗して生きる一つの命の物語である。

プロローグ2（前書き）

誤字脱字の報告大歓迎。

プロローグ2

太陽の光をさえぎるほどに成長した木々がうっそうと生い茂り暗くひんやりとしたここは「密林」と呼ばれる場所。
昆虫やキノコ、そして小型のモンスターに事欠かない、静かだが葉音や虫の声で賑やかな場所である。
しかしどういうわけか、今日はいつものうるさいほどの虫の声がなく、かわりに森に響く音があった。
森の中を響いてくる音は木々が倒れるような、地面のゆれを伴う重低音。そして時折聞こえてくる聞く者の体を震わせる何者かの咆哮。
響いてくる音の方向に近付いていけば、暗い森の中にまるで道を造るためになぎ倒したかのように一直線上に倒れた木々と、まるで決闘場のような開けた空間が広がっていた。

周囲の木々がなぎ倒され、森の中にぽっかりとあいた空間で対峙する二つの生き物がいた。
対峙する距離は２０ｍほどだろうか。
鋭い輝き放つ双眸と、見ただけで力強さを感じさせる１５ｍを超す体躯、広げればその全長に匹敵するのではないかと思われる立派な翼、刺の生えた先端を持つ、竜の全長の3分の1を占める長い尻尾、そしてその体のほとんどを覆う、赤黒く光を反射する硬い鱗を持つ存在。
翼を持つ竜、所謂“飛竜”と呼ばれるモンスターであり、その中でも気性が荒く、何より強い、“飛竜の王”“空の王者”とも言われるリオレウスだ。
その姿、その瞳に睨まれれば気の弱いものなら卒倒し、気の強い

ものでも濃厚な死の恐怖に動けなくなるだろう。
まさに王者と納得してしまう力強さと風格がそこにあった。

一方は、その身を赤い鎧に包み、右手に刺々しい片手持ちの剣、左手に丸盾を装備し構える、２ｍほどの人間。
リオレウスの正面に立ち、空の王者の威圧に負けずに構えをとれる人間。
モンスターが支配するこの世界でモンスターを狩る者、ハンターと呼ばれる人間だ。

しかしそのハンターをよく見てみれば、頼もしかった赤い鎧は全体のいたるところがボロボロに砕け、砕けた部分からはその下にあるインナーはおろか新しくできた傷や火傷がのぞいている。
その手に持つ剣の刃は、何度も岩に叩きつけたかのように刃こぼれをおこし別の意味で刺々しい。丸盾に至ってはすでに下半分がどこかに行ってしまっていた。

対峙しているリオレウスに大きな傷は見当たらない。そこに岩のようなどっしりとした存在感を持ってハンターを睨みつけている。
それに対し、ハンターは流れ落ちる汗をぬぐうこともできず、明らかに体力の限界だと言わんばかりに肩を上下させ荒い息を吐き、さらに膝が、いや脚全体が震えている。
強者と弱者のわかりやすい比較がそこにあった。
圧倒的な強者に対し、ハンターは、あまりに頼りなく見えた。

本来であれば、リオレウスと距離をとって体勢を立て直して挑むか、巨体ゆえの小回りのきかないところを突いて足で翻弄して、その間に逃げるのがベストだろう。
しかし、対峙している状態から背を向け走り出す、という2つの手順を消化するには２０ｍという距離はあまりに近すぎる上に震え

る脚で逃げ切れるわけもない。動きで翻弄するにしても、震える脚ですばやく動くのは不可能だろう。むしろ転んで致命的な隙を作りそうですらある。

詰んでいる。まさにそう言っていい状況であった。

唐突にその停滞していた場が動き出す。

リオレウスが頭を下げ、まるでスタートを待つ陸上選手のように体重を前方に集中させ始めた。

その場で１・２回足場を確認するように足踏みをする。

尻尾をバランスを調整するように１振りし、

「！」

いきなりハンターに向けて走り出した。

轟音を立て巨大な爪と圧倒的な力で地面を掘り返しながら進むリオレウスは１５ｍを超すであろう巨体からは想像できぬほどの速さで、２０ｍの距離を一気に詰める。

その巨躯に見合わぬ速さを前に、ハンターは震えた脚とは思えぬ素早い動きで横に走った。

巨大な竜は小回りが利かない。頭を下げ、前に引っ張られるように加速している突進中ならばなおさらだ。

すでに半分の距離を走破して勢いのついたリオレウスは突進のコースをわずかにしか変えることができない。

ハンターは死の一撃となるだろう突進の直撃コースからなんとかずれることができたのだ。

だがいかに直撃を避けたとしても、リオレウスの体は巨大でそれを避けきるほどの距離が空いたわけではない。頭を避けても胴や翼、さらに脚元には巨大な爪が迫っている。

満身創痍のその体で、当たれば致命傷はまぬがれないということは変わっていないのだ。

すでに残り３ｍほどに近付いたリオレウスの前で、ハンターは走るのをやめ、半分になってしまった盾を構え、腕以外の全身の力を抜く。

半分になってしまった盾、ハンターは左手に備えた盾をリオレウスの迫る胴に添えるようにして構え、

「ぐぅっ！！」

衝突の衝撃に逆らわずに受け流した。

リオレウスの突進を受けたハンターは、体の力を抜いていたことで空中に浮き上がった。

鈍い音を立て、衝撃を受けた盾を中心として体がくの字に曲がり、必然ハンターの頭が下がることになる。

下がった頭の上を、荒れた風を伴ったリオレウスの巨大な翼が通り過ぎて行った。さらに浮き上がったハンターのすぐ下を、勢いを緩めることのない巨大な爪が通り過ぎて行った。

ハンターはあえて力を抜いて突進を受け、その衝撃で体を浮かせ曲げることでリオレウスの頭を避けた後に来る巨大な翼と地面を掘り返す爪の脅威をなくし、盾の丸みをうまく使い、必要な分の衝撃以外を逆らうことなく受け流したのだ

突進の直撃、さらにそのあとに来る翼と爪の脅威を乗り切ったハンターは残った盾でリオレウスの胴の鱗の表面を滑らすように受け流そうとした。

だが、いくらハンターの技量が優れていても受けた衝撃は２０ｍの助走をつけた巨体の突進であり、その衝撃にハンターの体が吹き

飛ばされた。

絶体絶命の淵にあっても生き残るための行動をとれるハンターの冷静な頭脳と胆力は称賛されるべきであろうが、健闘もそこまで、元々満身創痍だったハンターはすでに限界に達していた。

リオレウスが突進の勢いで地面にダイブしたのと同時。吹き飛ばされ、地面を削るように転がったハンターは、痛みに悶絶することもできず力なく横たわっているだけであった。

Ｓｉｄｅ主人公

それまでのハンターとリオレウスの攻防を茂みの中から見ていた俺は大きく息を吐いた。

ハンターは動けない。ゲームで言うなら１乙だったか。

ここまで生き残るのがハンターの仕事。

ここから先は俺の仕事だ。

小さく息を吐き、大きく吸って息を止める。

さっきまで恐怖に逆立っていた自慢の群青色をした毛が、今は緊張に流れる汗で張り付いているような気がする。

握りしめた手のひらにある肉球がじっとりと湿っているのがわかる。

相手は自分の数十倍は巨大な竜。

震える体を全身に力を入れなんとか抑え、目線をハンターからリオレウスへ移す。

ハンターを轢いたリオレウスは巨体ゆえのゆっくりとした動きで方向転換の真っ最中だ。

（チャンスは今しかない！）

覚悟を決めて脚をたたく。

最後まで震えていた脚はそれで震えを止めてくれた。

隠れて観察していた茂みから弾丸のように飛び出しリオレウスの正面へ！

リオレウスの正面で目立つようにとび跳ねながら腹に力を込め、声高らかに叫ぶ！！

「ニャアアアアアアアアァァァァ！！！」

俺のその声を合図に別の茂みに隠れていた４匹の猫のような姿をした生き物が勢いよく飛び出し、倒れたハンターに駆け寄った。

いきなり現れたうるさい俺に注意がいっているリオレウスのスキをついて、４匹でハンターを担ぎあげ、ニャーニャーと声をかけながらそのまま茂みに二足歩行で走って行くのが背中越しにがわかる。

（ニャーニャー言うな！こっちに向いてる注意がそっちに行くだろうが！！）

どうやらリオレウスはこっちの叫び声に気をとられて俺の背後の声には気づかなかったようだ。

なんとかハンターを連れて逃げるのに間に合いそうだ。

そんな彼らの囮になってとび跳ねながら、恐怖で涙目になりながら叫んでいる群青色の塊である俺の名は「シラタキ」

この名前をみておわかりの方もいると思うがあのカ〇コンの食べ

物シリーズに当たってしまったかわいそうなアイルーであり、別の世界からやってきた転生者なのであった。

1－1．おはよう（前書き）

誰も見ていなかったと思うけど前のと差し替えました。
即興で書いたのでめちゃくちゃですが、前よりはましなはず！

誤字・脱字報告大歓迎。

１―１．おはよう

ガタン…ガタン…

一定のリズムで鳴る音と振動で意識が浮上してきた。

この音はなんだろう？

俺は部屋で寝ていて、俺の部屋にはこんな音が鳴るものはないし、俺のベッドは勝手に揺れない。

それに俺のベッドはこんなに温かかっただろうか。

布団の中がやけに温かい、でもなんだか安心できるような気がする……。

昨日は書類作りで遅くまで起きていたのでまだ眠いのだ。

薄目を開けて明るさだけ確認すれば、まだ真夜中と言っていい暗さだ。

まだ寝れる。

頭にかかる眠気と定期的な音とゆれが気持ちよくて俺はまた眠ってしまった。

思えばここから俺の次の人？生が始まったのだと思う。

１―１．おはよう

なんだか今までにないほどぐっすり眠れた気がする。

ここ最近は書類作成とかであんまり長く眠れなかったからなぁ。

布団をどけて両手を地面に着き、お尻を高く上げて脚に力を入れ

て後ろに引っ張る。
ん～～ッ！やっぱりこれがないと朝が始まった気がしないね。

「ん？」
はて？俺は普段からこんなめんどくさいことをやっていただろうか。
このポーズはあれだ、ヨガで言う猫のポーズ。
うちの猫も普段からやってるあれだ。やっているのは猫であって俺ではなかったはずなんだが。
ボーっとしていた頭が回り始めると、周りの状況も少しわかってくる。
まず外は結構明るい、おそらく8時は過ぎているだろう。
俺の腹時計もそれくらいだと言っている。

ここから見える景色は結構いい。
緑の森と青い空、外からは火を焚いているのか木の爆ぜる音が聞こえてくる。
ぬぅ、この漂ってくる香りはなかなかのものだ。
思わず腹が鳴ってしまうが、お腹がすいているのならこれが正常な反応だろう？
恥ずかしくなんてないよね！

自分への言い訳が終わったところで、今いる場所を見てみよう。
俺がいるところは、どこかの馬車？のようなものの中、だと思う。
断じて俺の部屋ではない。
木箱や布でくるんだもの、小物から大きなものまで積まれているが、雑多な感じはしない。
上は幌で覆ってあるタイプで、幌は布でも合成繊維でもない、何かの皮だろうか、硬くてごわごわしたものをつぎはぎして大きな一枚布にしているようだ。

そして幌を触った時にわかったことだが、俺の手が青色の毛におおわれていた。
俺の手はこんなに毛深かっただろうか？
確かに俺は毛深い方だったが、地肌が見えないくらいに毛深いとは思えない。

（んー？）

何かおかしい、何がおかしいかわかっているけどわかりたくないような気がする。
脳が考えるのを拒否しているのがわかる。
働き始めてこれまで、いろいろ理不尽なこともあったけど、ここまで脳が考えるのを放棄しようとしてるのも初めてだ。
何この感覚、初体験。
目の前に手を持ってくる。
その掌は、みずみずしさで溢れていた。きっと押せばプニッっとした弾力で俺の指を押し返してくれることだろう。
いわゆる肉球である。
飼い猫の肉球を押してストレス発散をする俺がいうのだから間違いない。

俺の手に肉球がある。そして飼い猫の手にも肉球がある。
このことが示すことは、つまり……
まてまて、まだ結論を出すのはやい。まずは自分の体をしっかり把握しようじゃないか。
（顔は？俺の顔はどうなってる？）
周りを見渡すが鏡のようなものはない。
手を顔にのばせば、これは、…やだ、鼻がちょっと湿ってる……。
鼻はそこまで高くはない、おそらく人間と同じようなもんだろう。
鼻の下には「ω」のような部分があるみたいで、そこから、おそ

らくひげが生えている。
触ってみるとやたら敏感で、引っぱられたら相手を張り倒しそうだ。
（うん、これ人間じゃないね……）
こんな特徴的な顔をした人間がいたら、見てみた…くないなぁ。

頭のてっぺんには二つの大きな耳がある。
幌の外の焚火の音がわかるくらいだから、人間の耳より性能はいいのだろう。
目はそこそこ大きい、何の生き物になったかわからないが、色を識別できる種族でよかった。
遠近の調節もちゃんとできるし、むしろ前よりいい感じだ。
頭はいい、だいたい分かった。次は体だ。

自分の体を見下ろせば、そこには群青色の毛並みに包まれた４０ｃｍくらいの体が。
顔を入れてもおそらく身長が５０ｃｍくらいのものだろう。ちいさい。
胸の毛並みの所に周りより少し濃い毛で小さい猫の足跡のようなマークができている。
ほかにも足から体の脇を通って腕に、おそらく首や顔にも胸と同じように少し濃い毛でラインが出来ている。
虎柄、だろうか。鏡がほしい。
群青色の毛並みは触ってみるとなかなか心地いい。手入れが行き届いている。
今毛並みを触っている腕は、だいたい２０ｃｍくらい。掌に肉球があるけど、指は毛は生えているが普通に人間みたいに細長い５本指。
これなら道具だって人間のように扱えるだろう。
脚もだいたい２０ｃｍ、これは座って伸ばしているので立ち上が

ると身長１０ｃｍ分くらいになるかな？
太ももの筋肉は程よい弾力を返してきて、無駄な脂肪がないことがわかる。
きっと足も速いだろう。
足の後ろからときどき覗くのは、尻尾……なんだろうなぁ。
こちらもなかなかいい群青色の毛並みをしている。
こう、ちらっと見えてまた隠れるのを見るとなんだか……
ちらっ　ソワ　ちらっちらっ　ソワソワ
ニャー！　ニャー！

……

は！？気づいたらに尻尾を追いかけてしまった！
尻尾を追いかけてその場で回るなんて、これちょっと、いやかなり恥ずかしいんだが……。
こ、これからはあまり尻尾を見ないことにしよう。
しかし、今のでわかったことがある。
そのわかったこととは鳴き声！「ニャー」
（つまり俺は猫だったんだよっ！　な、なんだってーー！）
って、
（俺が、猫になっているだと……？！）
あまりの出来事と決定的な証拠を得た行為があまりに馬鹿らし過ぎてしばらく呆然としていたのだった。

「シラタキー、暴れてないで出てきなさい。あら、どうしたの？ぼんやりしちゃって。
おはよう。早く下りてきなさい、朝ご飯よ」

「あ、うん。わかったよ母さん」

しばらく呆然としていたら、御者台の方から水色の毛並みをした猫がこちらを覗きこんでいた。

さらさらっと音が出そうなくらい柔らかく風に揺れる水色の毛には胴の部分に俺と同じような柄が入っている。

聞いたことはないがどこか安心できる高めの声。

先ほどからの空腹もあるし、このままでは朝ご飯を食べられない。

急いで馬車？から降りようふちに手をかけて、止まった。

（母さん？）

たしかに俺はさっきの猫の声を聞いたことがないはずだ。

なのに、ごく自然に母さんだと呼んでいた。

そもそもすぐに女性だとわかった。俺に猫の性別を判断するスキルは……なんとなくわかる気がするけど、一発でわかるのは明らかにおかしい。

（そもそも俺はなぜ猫になっている？ここはどこだ？さっきの猫は母さんなのか？これ馬車なのか？むしろ現実か？）

今まで考えないようにしていたことが一気に頭の中に浮かんでくる。

いろいろな考えが頭の中を巡るが、答えはいっこうに出てくれない。

下りる途中のポーズで固まっていると、目の前にまっ黒な毛並みをした猫が現れた。

「おはようシラタキ。早く来ないとお前の朝飯食べちまうぞ」

笑いながら俺の両わきに手を入れて持ち上げ、移動していく黒い

猫。
身長は俺の2倍くらいだろうか。
毛並みは見たまんま真っ黒で、俺や母さんに比べると少し硬い…
…気がする。
わかりづらいが、胸のところにより黒い毛で俺と同じような柄が入っている。
その漆黒の毛並みと耳に心地いい低い声がいかにも力強い。
「ん？元気ないな。いつもなら膨れて飛びかかってくるのに」
この猫は父さんだ。
この猫が父さんだというのはわかるが、俺はこの猫を見たことがない。
さっきの母さんもそうだが、知識ではなくこのからだの本能の部分でわかっているような感じだ。
「まぁ、今日は村に行く日だしな。緊張するのもわかる。
だがまずは腹ごしらえだ。食べて元気出すんだ！」
と、そこまで言って俺を支えている腕を入れ替え、くるっと180度回転させた。
父さんの顔が見えなくなって代わりに馬車？からは見えなかった外の風景が目に飛び込んでくる。
圧巻、とでも言えばいいのか。そこにはまぎれもない大自然が広がっていた。
前を向けば広大な草原が広がり、遠くにうっすらと山並みが見える。
見渡す限りの大草原。遠くに何か生き物が群れで動いているのがわかる。

こんなものは俺のいた日本のどこでも見たことがない。
俺のいるところから１０ｍくらいの所に草が生えてない道のようなものが見える。
日本のようにアスファルトで固めたものではなく、生き物がその足で何度も踏み固めた、土がむき出しの道だ。

首をひねって周りに目を向ければそこは森。
俺の数十倍もの巨大な木々が陽の光を遮り、今いるところは日陰になっている。
木々の隙間から差し込む陽の光がちかちかしていて眩しい。
森からは冷たい空気が出て俺の体を震わせる。ここがいかにも現実だというのがわかる。

ちょうど森と草原の境目。
そこで竈を作って火を焚き、その上に置いた鍋から木の器に朝ご飯をよそう母さんと、俺をぶらーんとさせたままそんな母さんに近付く父さん。
そしてぶらーんとなったまま大自然に圧倒されて呆然としている俺。

俺のこの世界での生活は、そうして始まったのだった。

1―1．おはよう（後書き）

アイルーの言葉の「ニャ」は省略させていただきました。
ぽかぽかアイルー村仕様で行きたいと思います。

ちなみに、作中の主人公の体の大きさはうちの猫（6歳くらい）を参考にしています。
アイルー（成猫）はそれの2倍くらい？の設定です。

1―2．よろしく（前書き）

独自設定がこの話からあふれ出してきます。
あとご都合主義もあります。
それでもいいよ、という方はぜひ読んでください。

誤字・脱字、おかしい所の指摘大歓迎です。

1―2．よろしく

「「「いただきます」」」
食事の前の言葉が日本といっしょだったことに、少しほっとしながら食べ始める。

手に持った器の中身を見ると、少し濁ったコンソメスープのようなもののなかに肉のようなものが入っている。

手に持つ木のスプーンで食べてみれば、スープは何というか、大味だ。
味はちょっとした塩味だろうか、それとすこしピリッとした辛み。
辛みで目が覚めるが、スープ自体は不味くはないが美味くもない。

他の例がないからわからないが、この世界の調理が全てそうなのか、俺の舌が細かい味がわからなくなったか、どっちだろうか。
後者だとしたら大変なことである。
前者ならまだ俺が料理をして、美味い飯を作って見せる。
しかし後者だったら……。
俺の生きる楽しみの一つの食事が……、生きる活力であり数少ない楽しみである食事が。味気ないものになってしまう。

（今度料理のときに見学してみよう。絶対にそうしよう）

そんなことを内心考えながら次に肉を噛む。

これは、なかなかうまい。
おそらく何かの肉をスープでもどしたものなんだろうが、この犬歯にくる噛みごたえと、噛めば噛むほど染み出す肉のうまみと塩味

が何とも言えない。
スープの塩味はもしかしたらこれが染み出したものなのかもしれない。
ビーフジャーキーほど洗練されていないが、どことなく野性味があるこちらの肉の方が俺は好きだ。
肉を噛んで、ときどきスープを飲む。
気がつけば器の中身はなくなり、俺の腹は一杯になっていた。

1―2．よろしく

腹も満たされ、混乱気味だった頭もだいぶ落ち着いてきた。
やはり食事は偉大だ。本能万歳。
満腹になった腹をなでながら両親を見れば、　食器の片付けを母さんが、火の始末を父さんがしている。
母さんは、木の器に先に取り出しておいた灰をかけて汁気をとり、灰を落とした後に湿った布でぬぐっている。
父さんのほうは砂をかけて火を消している。
そんな両親を見ながら、俺は混乱してたんだなぁとつくづく思う。
落ち着いた頭で見れば、両親と俺がとても見覚えのある姿であることがわかった。
猫ではない。いや、ある意味猫なんだが、両親は今二本足で直立

歩行している。
そんな猫は物語の中の存在だ。そして、俺の記憶にある彼らも、やはり物語の中の存在だった。

アイルーという種族がいる。
モンスターだとか猫人族だとか獣人族だとか言われる種族である。
姿はネコによく似ていて、運動能力と知能がそれなりに高く、二足で直立歩行し両手で道具を操る。
人ほどでないにしろ文明を持ち、自分達の言語を持つが人と話すこともできる。
仲間意識が強く、襲われると集団で逆襲してくるという習性も持っていたりする。

そんな彼らは「モンスターハンター」略して「モンハン」と呼ばれるゲームの中のキャラクターで、その愛くるしい外見と豊かな表情、キッチンで料理してたり狩りのお供にと大活躍なモンハン屈指の人気モンスターなのである。

そう、ゲームの中のキャラクターのはずだったんだ。
なのになぜか、俺の目の前にはアイルーな両親がいる。
そしてその息子である俺も、またアイルーだったのだ。

もう認めるしかない。（まだ認めてなかったのかという意見は聞かない）
俺はアイルーになってしまった。しかもおそらくは憑依と言われ

るものだろう。
この体の持ち主が、今は眠っているのか、もういないのかはわからない。
知識を引っ張り出そうとしても、まだ幼かったせいなのかリセットされたのかは知らないが、この体持ち主の記憶はどこを探してもなかった。
両親のことがわかったのは、きっとこの体が覚えていたのだろう。
勝手に体を使って生活するのは申し訳ないような気もするが、俺はまだ死にたくない。
勝手に使っている手前、この体をそうそうに死なせるのもなんだか申し訳ない。

ならば、この体の持ち主の分まで生きるのがいいのではないだろうか。
もし起きてきたらどうなるか、それはまたそのとき考えればいい。
もういないなら、死んだときにでもたぶん会えるだろう。

正直、仕事漬けの前の世界には疲れ切っていたし、この世界を楽しみたいという気持ちもある。

ならば楽しもう。

この体の持ち主と出会えたときに、悔しがるほどの楽しい体験を話して聞かせられるように。
眠っているなら起きるまで、もういないなら最後まで、俺が責任を持って生きようじゃないか。

この体の持ち主が起きてきたときに、眠っていたのを悔しがるくらいに楽しく生きること。

ひとまずはこれを目的にしていこう。

（よろしくな、だれかと俺の体）

さて、目的が決まったら次は目標だ。
この世界を楽しむ上で情報は不可欠。
いくらゲームで知ってると言っても、知ってるのはゲームの中の内容だけ、それもＰ２ＧとＰ３だけだ。
モンスターのパターンがここでも同じとは限らないし、何より生活する上で役に立たない。
生活に根差した情報を知らなくては。これが当面の目標だ。

情報収集を踏まえて考えると、両親がアイルー語をしゃべっているのが理解できるのは本当に助かった。
文字は書けなくてもなんとかなるが、言葉が通じなかったらボディーランゲージくらいしか手段がない。

大雑把なことは伝えられても細かい情報なんて手に入るわけがない。
それに両親の前でいきなり違う言葉をしゃべり出したら、最悪その場に捨てられてたかもしれん。

日本語を話してた自分の子どもがいきなりアラビア語を話し始めて日本語がわからなくなっていたら……。
最低でも病院行きだな。

本当にこっちの言葉が話せてよかった……。

「よーし、そろそろ出発するかー」

竈の火に砂をかけて始末していた父さんが母さんの様子を見た後に伸びをしながら言う。

その声に反応したのか、馬車の前の方で何かが“のそり”と動いた。

びっくりした。今まで“それ”に気づいていなかった自分にもだが、“それ”の大きさに。

”それ“は巨大な竜だった。

草食の恐竜、それをイメージすればなんとなくわかりそうな外見をしている。

馬のように細い頭から後ろに長くのびた鶏冠が特徴的で、恐竜で言えばパラサウロロフスがもっともよく似ているだろう。

尻尾の先端には刺が生えていて、子どもが狙われるとそれで攻撃したりする。

首筋から背中を通って尻尾へと、背骨の上の部分に皮の変形した背びれがあり、一説にはそれで体温の調整をしているのだとか。

体の内側（腹側）は皮だが、それ以外の背中や首には鱗をまとい、その表面には黒と灰色の縞模様が入っている。

高さは２ｍをゆうに超え、全長は７ｍ以上ありそうだ。

モンハンに登場する草食竜「アプトノス」

おとなしく、力が強い。

さらに飼いならすことも出来て馬車を引いているムービーを見たのを覚えている。

まさかこの目で見ることになろうとは。

この世界がモンハンの世界であると証明する、初めてのモンスターとの出会いだった。

衝撃の出会いであったアプトノスは、記憶にあった通りおとなしいモンスターだった。
父さんがアプトノス用に置いていた水桶を馬車（竜が牽くから竜車か）に積み、母さんが鍋と食器を積む。

竈は壊さず、ここを通る別の人用に残しておくらしい。
父さんが言うには、横に石を積んでおいて、その石が3段以上でなければそこで使っていいらしい。
3段以上になると、最悪肉食のモンスターが場所を覚えて襲いかかってくるそうだ。
だから横に置く石は竈の横から離し過ぎず、目に着く所に置くのだとか。
もちろんそこを使うかどうかは利用者次第。
ちょっとした心遣いだということだろう。
ちなみにここの竈は父さんが乗せた分で今2段である。
作ったんじゃなくて元々あった竈を使っていたらしい。

父さんは俺を御者台に乗せると、
「んじゃ母さん、俺は寝る」
と言いながら竜車の中に入って行った。

なんでも、昨日の夜は今日の竈がある場所まで止まらずに来ていたようで、止まったのはちょうど朝日が出たくらいだったらしい。
今は朝日が出てからだいたい4時間くらいたっているらしいから

少しは寝たのだろうが、寝足りなかったのか布をかぶるとすぐに寝息が聞こえてきた。

以外に静かな寝息でいびきはなかった。

「お父さんいびきかかないのか…」

「あら、前に話さなかったかしら？行商人でいびきをかく人は少ないのよ」

いつの間にか御者台に上がっていた母さんが俺の独り言に答えてきた。

「いびきなんてかいてたら、モンスターに食べられちゃうからね」

いたずらっぽくウインクしているが、言っていることは恐ろしい。

しかし、なるほどである。

寝ている時、主に夜だろう。

毎回村や街に泊まれるわけではあるまい。日によっては野宿をすることもあるだろう。

そんな時に自分から音を立ててここにいますよーと主張するということは襲ってくださいと言っているようなものだ。

確実に襲われるわけではないだろうが、少しでも可能性を減らすのは当たり前か。

「それじゃ、出発！」

母さんが手綱を引くと、アプトノスが立ちあがり進み始めた。

一匹だけだが、さすがはモンスター。水やら荷物やらを積んでかなり重いはずのこの竜車を牽きながら悠々と進んでいく。

ちなみに、アプトノスなどの草食竜は睡眠時間が短くても問題な

いらしい。
強い肉食竜からより確実に生き残るための進化なのか、短い睡眠で十分休めるようになっていったのだとか。
その分知性が低く、水や餌を多くとるらしいが、行商人が車を牽かせる竜は、ある程度水や餌を抑えても大丈夫なように調教されていて、休憩のときに水と周りの草、それと増強作用のある干したアオキノコと干した薬草を食べさせるので足りるとか。

便利すぎる。

さすがに調教する手間がかかるので、買うとかなり割高なものになる、らしい。
懐に余裕がある商人でもない限り、街から街へ移動する際はレンタルするらしいが、もちろんレンタル料以外にも、モンスターに逃げられた時の賠償金とかもあるらしく、車を牽かせるモンスターを準備できるかどうかで商人の格が決まるとか。

車を牽かせるモンスターには他にポポとかもいるらしいが、値段としてはポポの方が安いらしい。

アプトノスは適応力が高く、極端に寒い・暑い場所以外はどこへでも行ける。
浅い川ならそのまま渡ることもできる。
雪山や凍土など、アプトノスが活動できない場所でしかポポの需要は高くないので普通に商売するにはアプトノスを買うらしい。

ポポの外見はまんまマンモスである。
その見た目に違わず、生息域はだいたい雪山か凍土といった寒い所。
他の場所に行けないことはないのだが、砂漠と火山がアウトらし

く、あまり人気がないらしい。
その分雪山とかでのレンタル料は割高になっていて、バランスがとれているとか何とか。
うまいことできているものである。

しばらくガタゴトと進み、その間森やら草原やらを眺めてすごしていると、
「シラタキ、今日はおとなしいのね」
心臓が跳ねる。
やはり“俺”になる前の子どもとはだいぶ行動が違うらしい。
「いつもは手綱を握りたいって騒ぐのに。やっぱり村に行くのは不安なのかしら？」
村？そういえば、父さんがそんなことを言っていたような……。
村に行くことがなぜ不安なのかわからないが、ここは合わせていた方がいいだろう。

「ちょっと不安かも」
「そっか。……ちょっと来なさい」
母さんは自分の膝を片手でポンポンと叩いている。
そこに座れ、ということだろうか。
ここで行かないのもおかしいか？かなり恥ずかしいんだが……。

座った俺の肩の横を通すように手綱を持ち、話しかけてくる。
「今から行くのは私とお父さんが生まれた村よ。みんないい人だから大丈夫よ。」
おぉう、アイルーである両親が生まれた村ならきっと周りはアイルーだらけだろう。

猫好きである俺にとってはきっと天国のような場所に違いない。
にやにやしている顔を見られないように頭を下げていると、それを不安がっているととったのか母さんがさらに話しかけてきた。

「シラタキは村に着いたら何がしたい？
前にも話したと思うけど、アイルー族の子どもは2歳になると両親の生まれた村で1・2年過ごすっていう決まりがあるの」

初耳である。
そして何気に俺は2歳らしいことも発覚した。

「その村でいろいろな仕事を経験して、自分に合った仕事に就くの。
シラタキは頭がいいから学者さんにでもなれると思うなぁ」

おそらく、息子のいいところをほめて元気づけようとしたのだろう。
俺は母さんの膝から降りて、「ありがとう」と言って背中を向けて風景を見始めた。
母さんはお礼を言ったときに少し驚いた顔をしていたけど、今はにっこりしているんだろう。
背中越しに雰囲気が柔らかくなったのがわかった。

ゲームの中でアイルーは人気だったけど、そんな決まり初めて知った。
俺がゲームしかやってなくて設定資料とか興味なかったから載っていたのかもしれないが、今知らなければ意味はない。
アイルーの仕事も、知っている限りではキッチン・オトモ・農場管理くらいだ。
何があるのか、何ができるのか分からない。
でもまぁ、俺の目的は楽しく生きることだ。なんでも経験してみ

ようじゃないか。

「何がしたいかわかんないけど、いろいろやってみたいな」

「そう、村ではいろいろできるから楽しみにしておくといいわ。村には今日中につくと思うから、楽しみにしておいてね」

その後は会話もなく、静かに竜車が進むだけだった。

しばらくたって風景を眺めることに飽きた俺が、無理を言って（わがまま）手綱を貸してもらい、暴走させたりして怒られたのは、全くの余談である。

1―2．よろしく（後書き）

旅の工夫とかは完全に想像で描いてます。
明らかにおかしい所以外はスルーでお願いします。

1―3．こんにちは（前書き）

独自解釈・設定あり。
誤字・脱字の報告大歓迎。
あと、微チートあり。

１―３．こんにちは

竜車を暴走させて、起きてきた父さんにこってり絞られた後、２回の休憩をはさむ以外はひたすら竜車は進んでいた。
太陽が朝の位置からだいたい９０度位移動しているみたいだから、今は午後２時くらいだろう。

「よーっし、ここらで休憩するぞ」
昼くらいに御者を母さんから交代した父さんが言う。
そこは道の傍らに一本の大きな木が生えた場所だった。
左側の奥の方、だいたい１ｋｍくらいの所に森があり、そこからこちら側は全て草原である。
見渡す限りの草原の中に土色の道が一本、延々と続いている風景と言うのは、なんとなく、いい。
昔から森の中にある一本道とか家と家との間の細い、それこそ人１人分くらいしか通れないような路地が好きだった俺にはたまらない風景だ。

改めて風景を堪能していると、父さんが木陰に入った竜車を停め、手綱を木の枝の一本にくくりつけた。
午後２時と言えば日中で一番気温が高くなる時間だ。
そんな中進むとアプトノスの体力の減りが早くなってしまう。
御者も暑くて疲れるからな。とは父さんの談だ。
なるほど、特に父さんの毛は漆黒だから余計に暑そうだ。

「ここでちょっと長めに１時間くらい休憩して、それからはもう休憩なしだ。今のうちにしっかり休んどけよ」
そう言って父さんは、アプトノス用の桶を手に御者台を降りて行く。

２回目の休憩で入れ替えた新鮮な水をアプトノスに与えるのだろう。
大きな水ガメは竜車の後ろの方に積んである。
竜車の前の方はこちらの生活スペースもあるため、万が一にも倒れてきてつぶされないよう他の荷物といっしょに固定してあるのだ。
飲み水は何かの皮で作った水袋に入れて御者台の近くにぶら下げてある。
竜車を止めなくて済むように、汗とのバランスを考えながら少しずつ飲んで行くのである。
頻繁にトイレに止まったりしていたら、時間はかかるわアプトノスは疲れるわでいいことがないからだ。

桶を持って後ろへ回って行く父さんの後姿を見ていると、好奇心がわいた。
父さんはあのアプトノスに餌と水をやるのだ、ここでそれを体験しない手はない。
「父さん！僕がアプトノスに水やりする！」
「お、元気が出てきたな。別にいいが、お前にゃ桶は持てんだろう。アオキノコと薬草持って来い」
「わかった！」
そりゃ水がたっぷり入った木桶（俺の体と同じくらい：約５０ｃｍ）は重すぎて持てないだろう。
むしろ前の俺でも持てたかわからない。父さんすげえ。

なんてことを考えつつ竜車の中へ。
前の休憩でアオキノコと薬草が入ってる所は見てたのでわかる。
乾燥させても青さが残るアオキノコを５つに少し緑が濃くなっている薬草を５束。
前の休憩でもこれくらいだったはず。それらを手に竜車を降り、急いでアプトノスの元へ走る。

「来たか。こいつが水を飲み終わったらお前がそれを食わせるんだぞ」
でかい。
最初に見たときは離れていたし、御者台は前が見えるように高めに作ってあるため、アプトノスの大きさがあまり感じられなかった。
しかし、間近で見たアプトノスはまさに巨大だった。
遠目に高さは２m以上と判断したが、それは今の俺と比べれば４倍以上の大きさということである。
こうして見上げているとそれ以上の大きさのように見え、押しつぶされそうな圧迫感があった。
考えてほしい、自分の身長の４倍以上の大きさのある生き物が自分の横に動ける状態でいるということを。
アイルーと竜種、俺はその存在の差に圧倒され、原始的な恐怖を感じて動けずにいた。

とそこに、
「なんだ、怖がってんのか？なら向こうで休んどけ。残りは父さんがやっとくからよ」
にやにやした父さんが、これまたにやにやしたような声で言ってくる。
挑発だとわかっていてもこれは乗らざるを得ない。
「やるよ！だから父さんはそこで見てて！」
反発心からか声を出したからか、未だに怖くはあるものの、動けないほどではなくなっていた。

持ってきたアオキノコと薬草をアプトノスの顔の横に差し出す。
フンフンと音を立てて匂いを嗅いでいるアプトノス。
（なんだ、こうしてみるとなかなかに愛嬌のあるような顔に見えなくもないじゃないか。今度からこいつはアプトと呼ぼう）
余裕余裕と俺が思っていた次の瞬間、その巨体に比べれば小さい

が、それでも大きいその口を開け、そこから４０ｃｍ以上もある舌を出してアオキノコと薬草をからめ取って、ついでに俺の指を少し舐めて行った。
背筋にゾワッ！っとした震えが走る。
前の俺が親戚の家の牛に餌をやった時と同じ感覚だ。
（あのヌメッとした舌に顔をなめられたら……！！）
想像するだけでも背筋が震える。
それにあの口の大きさ、俺の上半身くらいなら余裕で入るんじゃないか？
（こええ……）
俺にはアプトの、というか、竜の世話は向いていないのかもしれない。
そんな事を考えながら、俺はその場に固まっていたのだった。

１―３．こんにちは

１時間の休憩は長いようでそんなにのんびりしていられない。
父さんはアプトの世話をした後は車の方の点検をしている。
ここに来るまでに通った道は、お世辞にも整った道とは言えないもので、何度か大きいくぼみに入って傾いたり、大きな石を踏んでガタッと跳ねたりしのだ。
車輪や車軸にガタがきていないか確認して調整している父さんの顔は真剣そのもので、先ほど俺をからかっていた顔と同じものとは思えないほどだった。
母さんは荷物の点検をしている。
両親は実は行商人だったらしく、荷台に積んである大小さまざま

な荷物は今から向かう村で売る商品なのだとか。
傾いたときや跳ねたときに、荷物がつぶれなかったか、破損しなかったかを確認中である。
それ以外にも、旅をしている現在、途中で何が起こるかわからない。
何かがあった時に、使える物・使えない物の区別とその場所を把握していなければ、大変なことになりかねない。
特にモンスターのはびこるこの世界、護身道具セットのけむり玉や閃光玉・こやし玉がちゃんと使えるかの確認は絶対条件。
ハンター必須道具とも言うべき閃光玉は見てみたかったが、生き死にを左右する道具のチェックは、やはり真剣な表情で行っており、とてものぞき込んだり話しかけたりできるような雰囲気ではなかった。
アプトはすでに満足したのか、少しでも体力を回復するためなのか、木陰で眠っている。
そして俺は何をしているのかと言うと、幌の上に座って見張り中である。

車や道具の点検を見学させてもらおうとしたのだが、危ないからダメ、と言われてすごすごと引き下がるしかなかった。
（アプトの餌やりはＯＫで点検はダメなのか……）
なにもやることがない。手持ち無沙汰だ。
暇を持てあましつつ、周囲をぐるっと見回した。
朝の風景と比べてみると、道から森が遠くなったほかに、うっすらと見えていた山はだいぶはっきりと見えるようになっていた。
手前の小さい山の奥にさらに大きい山があり、奥の山には雪が積もっているのがわかる。
今はそこそこ暑い季節らしいので、あの山の雪はきっと1年中溶けないのだろう。
どうも向かっている村はあの山の近くにあるらしく、山を目指し

て進んでいるのだ。
今までの移動速度から考えれば、たぶんあと2・3時間で着くだろう。
6時間で3回目の休憩をしていることから、休憩はだいたい2時間に1回ぐらい。
この後休憩を入れないのは、村に入って休んだ方がいい、という判断からかもしれない。

山は近付いてから改めて見るとして、草原の方に顔を向ける。
草原には何もない。
実際には遠くにうちのアプトみたいな影が群れで見えるから何もないということはないのだが、見張りをして見るようなものは何もなかった。
ただ、森の方からの風が背中から草原に抜けて行き、影を作っている木の葉のざわめきと、草原を抜けて行く風が作る草のウェーブの共演は見事なものだった。
音と風景でこんなにも癒されたのはいつ以来だろうか。
俺が小学校の頃のまだ広かった田んぼのウェーブを見て以来かもしれない。
その田んぼは今はもうマンションになってしまってみることができないが、今この世界にいる俺が見る方法はどっちみちないだろうからあまり関係のない話である。

森の方は、うん、森だった。
朝の場所からずっと続いていることを考えれば、かなり広い森だということがわかる。
まぁ森らしく、木がたくさん生えていて中の方は暗くてよく見えない。
森の方から吹いてくる風に乗って、微かに何か鳥のような鳴き声が聞こえてきたりするが、それくらいのものだろう。

（どこかで聞いたことあるような鳴き声だなぁ）
そう思いながら視線を外そうとして、不意に湿った鼻を嗅ぎおぼえのある匂いがかすかにくすぐった。
（今の匂いは、どこかで……1人暮らししてる時に冷蔵庫に入れ忘れた料理を腐らせてしまったような……）
そこまで考えが進んだところで、「ぶわっ」という音が聞こえそうなくらいの勢いで全身の毛が逆立ち、体中から冷や汗が吹き出した。

俺の耳に聞こえてきたのは、聞き覚えのある声である。

俺はこの世界に来てからまだ一日。
この世界の生き物の鳴き声なんて、両親とアプトノスの声くらいしか知らない。
それなのに聞きおぼえがあるということは、この世界に来てからではなく、前の世界でやっていたゲームの中の鳴き声だということだ。
そして風に乗って微かに聞こえてくるこの声は、どことなく鳥を思わせるような、甲高い声であった。

それだけならまだいい。
それだけなら鳥が鳴いているんだろう、で済む。
しかし、今鼻に感じた、何かが腐ったような臭い。
そう、料理、むしろ肉を腐らせたようなあのにおい。
あれは、何かを捕食する生き物が消しきれなかった腐敗臭ではないのか？

考えすぎかもしれない。

腐敗臭はそこらへんで死んだ動物の死体が臭っているのかもしれない。
それに肉食の生き物が、臭いで自分の存在をばらすようなことをするとも思えない。
でも、もし万が一のことがあったら？
森という生態系の豊富な環境で、はたして死体が腐るほどの時間を、生きることに必死な動物が放っておくだろうか？
もし、肉食の動物の歯の並びに引っかかった肉が腐っていたのだとしたら？
猫の嗅覚は確か人間の数万から数十万倍だったはず。
犬には負けるが、それでも大したものだ。
その嗅覚に引っかかった臭いが間違いである可能性はどれだけ低いだろうか。
普通の人間なら絶対に気づかない。
視覚と聴覚に頼る草食動物だって気づかないだろう。
しかし、非力な猫（アイルー）だからこそ危険の前兆は敏感に察知できる。

『森の中』で『鳥のように甲高い声』と『何かが腐ったようなにおい』

この組み合わせで考えられるのは、モンハンのゲームでおそらく1番多く出てくるモンスター。

――――――――鳥竜種「ランポス」

思わず声を張り上げていた。
「父さん！」
「なんだいきなり、大きな声出して」
父さんの普通な返事がもどかしい。

「も、森！森になんかいる！！」
「あぁ？」
父さんが森を見るのと同時に、俺は飛び降りてアプトの手綱を結んでいた木の枝に向かい、ほどき始める。
アプトは俺の大声と慌てた気配に目を覚ましたのか、首を持ち上げ左右を見回し始める。
そののんびりとした行動がいまは恨めしい。
近くに置いてあった木桶を蹴り、残った水を全て捨てる。
木桶が転がった音に反応してアプトが立ちあがるのと、父さんがこっちに向かってきたのが同時だった。
「俺の目には何も見えないぞ。シラタキの気のせいじゃないのか？」
そう言いながら父さんは目を細めて森の方を見ている。
言われて気づいたが、確か猫は目があまり良くない。
近視だっただろうか、よく道路に飛び出て車に轢かれるのも夜中のライトが遠いか近いかがわからないためだと、どこかで聞いたことがある。
俺の目にはしっかり見えてるような気がするが、今は考えてる場合じゃない！
「においがした！何かが腐ったみたいな臭い！」
「ん～？」
父さんといっしょに鼻をひくひくさせてにおいを嗅ぐが、もうあの腐ったような臭いはしてこない。
（俺の気のせい？父さんはベテランの行商人らしいし、おれよりモンスターの生態に詳しいだろうし）
そう考えると少し落ち着いてきた。
鳥のような声は聞こえるが、本当に鳥の声なのかもしれない。
（勘違いだったら、これかなり恥ずかしい）
と思いながら森を見ていると、森の陰に何か青いものが横切った気がした。
（ん？）

もっとよく見ようと目を凝らすと、暗い木々の間に、青い何かがいるような気がする。
そしてその青い何かは数がどんどん増えてるような……
「父さん！逃げよう！お願い！！」
「どうした。何もいないぞ」
「僕には見えてる！森の中に青いのがたくさんいる！」

俺が「青いの」と言ったところで父さんの顔つきが変わった。
耳を頻繁に動かしながら、鼻をひくひくさせている。
竜車の中にいた母さんも森の方を見て耳をせわしなく動かしているのが視界の端に見えた。

「シラタキ、青いのがどれくらいの大きさかわかるか？」
「たぶんこいつより小さい！でも僕たちよりはだいぶ大きい！」
俺がアプトを指さしながら言うと、父さんがいきなり俺を抱えて御者台に上がり始めた。
その顔はさっき車の点検をしていた時よりも真剣で、何か焦っているようにも見える。
「母さん！出るぞ！」
そう言って俺を竜車の中に押し込み、御者台に上がっていく。

こちらの動きがわかったのか、森の方から聞こえる声が大きくなる、と同時に青いトカゲが飛び出してきた。
1匹2匹などではない、見えるだけで6匹。
人間と同じくらいかそれより少し小さいくらいの、細みの青い体躯に黄色い鳥の嘴のようにも見える口を持つ2脚のトカゲ達がこちらに向けて一斉に走り出した。

父さんが手綱をしならせ、アプトの背を打つ。

と同時に、アプトが今までとは比べ物にならない勢いで走り出した。

ランポスとの追いかけっこが始まった。

1－3．こんにちは（後書き）

微チートは、五感のデメリットが消えて、むしろ少し底上げされてます。
詳しくはまた別の機会に作中で。

１―４．こんばんは（前書き）

前の話を分割したら変な所で終わったのでキリのいい所まで加えて投稿。

誤字・脱字・設定や話への指摘大歓迎です。

１―４．こんばんは

父さんが手綱を繰り、アプトが今までにない速度で草原を駆ける。竜車の重さを感じさせないスピードで走るアプトは、ここに来るまでの速度に比べれば圧倒的に速い。

しかし、今回の追いかけっこの相手はモンハンの中でも身軽なモンスターで有名なランポスである。

正直、移動速度はそこまで速い印象がない。

ゲームでは跳びかかってくるのが主で、走るところなんてあんまり見たことがなかった。

しかし、現実に命の追っかけっこの今はその考えが間違いだったと身にしみてわかる。

何が言いたいかと言うと、

（こいつら結構はええ！）

ということである。

１―４．こんばんは

考えてみれば、やつらはハンターめがけて助走なしで３ｍ位をひとっ飛びできる脚力があるのである。

跳ぶと走るでは使う筋肉が違うかもしれないが、それでも十分に

驚異的な脚力である。

一方こちらはアプトノス。
力はあるが逃げ足、というとそこまで速くない。
しかも今は荷物満載の竜車を牽いての逃走である。
結果、スピードは比べ物にならず、逃げ出して数分だと言うのに距離をだいぶ詰められていた。

最初にあったあちらとこちらの距離１ｋｍは、すでに３００ｍを切ろうかというところだ。
遠くにはまだ大きな1本木が見えることから、せいぜいまだ5分程度しかたっていないだろう。
そうして考えている間にもぐんぐん近づいてくるランポスたち。
このままでは追いつかれて食べられてしまうのも時間の問題だろう。
そんな風に絶望していると、
「なんて顔してやがる。これくらい行商してればよくあることだ。
それに今回はシラタキが早めに気付いたからな。逃げ切るなんてのは簡単なこった」
と父さんが言えば、
「そうよシラタキ、ここはお母さんにお任せよ！」
そういたずらっぽく言って母さんが力こぶを作って見せる。

安心させようというのはわかる。
しかし、前では感じることのなかった、背後から迫る命の危機に安心などしていられない。
今の俺は毛がふくらみ、耳とひげがせわしなく動いていて、落ち着いていないことなどまるわかりだ。

「ふふ、大丈夫！お母さんいいとこ見せちゃうわよ！」
不安がる俺の顔を見てどう思ったのか、母さんが腰に手を当て、胸を張りながら言う。

……母さん、貴女そんなテンション高い人だったっけ？なんか別人みたいになってますよ？
と、母さんが腰の袋から何かを取り出した。

（……なんだろう、なんというか、この緊迫してるときに言うのもなんだが、すごく……雑です……）
母さんが取り出したのは、石に黄色い虫（動いてる）をくっつけて、それを葉っぱでくるんだだけの、何とも言えないものだ。

「それ、何なの？」
「ふふ、これはこうやって使うの、よ！」
言葉と同時に、手に持ったそれをランポスたちに向かってオーバースローで思いっきり投げた。
気づけば既に１００ｍをきった所にいるランポス。
その手前に落ちるように投げられたそれの行方を追っていると、それが地面に着くかつかないかのところで突然視界が暗くなった。
と思ったら視界が赤くなってまた暗くなった。
何だと思ったら、母さんが俺の目を手で隠したらしい。
手をどけてもらってランポスたちを見ると、その場で足を止め、頭を振ったり身体を大きく揺らしたりしている。
中には転んだのか地面でもがいているのもいた。
「今のは……」
「ちょっと待ってね。これで終わるから」
今度も先ほどと同じような作りをしたものを取り出した。
石と草で巻いてあるのは変わらないが、巻いてあるものが、なんだろう、何かの実みたいだ。

それを先ほどと同じように、今度は竜車とランポスたちの中間に落ちるように投げた。
地面に落ちた瞬間、くっついていた実が割れてそこから白い煙が爆発的に発生し、その場に充満していった。
さっきまで見えていたランポスたちの姿は、見通しの悪いその煙にさえぎられ見えなくなる。

さっきのも今のも、俺は多分どちらも知っている。
「ふふーん、もうこれでランポスたちは追ってこれないわよ！」
得意げに胸を張り、こちらに向けてドヤ顔をしている母さん。
こっちが素なのかもしれない。

「母さん、今の……」
「あれはね、閃光玉とけむり玉って言う道具なの。
閃光玉は使うと強い光が出るから、直視したら目がしばらく見えなくなっちゃうの。
けむり玉は名前の通り煙が出る道具で、使うと煙幕になってくれてすっごい便利な道具よ。
どっちも私が作ったお手製よ！」
テンションが上がっているのか、俺のせりふをさえぎって自慢し始める母さん。
俺は、「すごいでしょ～」と言っている母さんを放置して、さっきのことを考えていた。

あれが閃光玉。
あの動いていた黄色い虫は「光蟲」か。
たしか死ぬときに強烈な光を出すんだっけ……。
（光蟲よ、ありがとう。お前の犠牲は無駄にしないぞ）

母さんが俺の目を隠したのは閃光玉の光を直接見ないようにするためか。
一瞬視界が赤くなったのは瞼を閉じたときに光を見たのと同じだろう。
（……母さんの手のひらを通して俺の目に届くって、どんだけ強い光なんだ）
それを直接くらったランポスたちは痛みすら感じたんじゃなかろうか。
まぁ、同情なんてしないが。むしろざまぁである。
そしてけむり玉。
ゲームの中ではモンスターに気づかれずに近付くための道具、くらいしか印象がなかったが、こうして見れば、なるほど逃走用の方が使い勝手は良さそうだ。
目が見えないモンスターは臭いで追ってきそうだが、それは護身道具セットのこやし玉を投げれば済む。
目には閃光玉＋けむり玉。鼻にはこやし玉。
堅実な道具選びだ。

「――というわけで、ツタの葉のエキスを混ぜてカラの実に入れて投げると煙が出るのよ、すごいでしょう！もっとお母さんをほめたたえてもいいのよ？」
ちょっといらっとした。

「お父さーん、もう逃げ切れたみたいだしゆっくりで大丈夫ー」
「あいよー」

こんなすぐにスピードを落としていいものかと聞くと、
「ランポスにも縄張りがあるからね。あまり縄張りから離れすぎないように狩りをしてるの。
目をつぶしてる間に引き離したし、けむり玉のけむりはしばらく

漂ってるから、もう追ってくることはないはずよ」
とまたドヤ顔で言ってきた。

無意識に体中に込めていた力を抜く。口からは勝手に「はぁぁ」と安堵のため息が出た。
足から腰までまとめて力が抜け、尻もちをついてしまった。尻が少し痛い。
ついでに、気づかないうちに緊張してたのか、肩に力を入れっぱなしだったようで肩も痛い。
しかし、命の危険に比べたらなんと些細なことか。
それを見た父さんがにやにやしていたのはきっと気のせいだろう。

しかし、閃光玉とけむり玉を自作というのはすごいのではないだろうか？
村に着く前に母さんにいろいろ習ってみるのもいいかもしれない。

「もうあと1時間くらいで着くぞ」
父さんの声を聞きながら、母さんに調合レシピを習うことを決めたのだった。

なんのかんのとあれから1時間以上たった。
まだ村には着いていない。
逃げるときにアプトに無理をさせたので、一度軽い休憩をとったからだ。
休憩からこっち、少しゆっくり進んでいるのも原因だろう。
それでももうそろそろ村が見えてきてもいい頃だろう。

結局、母さんに調合レシピを教えてもらうことはできなかった。
休憩中におねだりまでしてみたが教えてもらえなかった。
なんでも、「調合の中には危険なものも多いし道具もいろいろ使うから、お母さんは教えられる立場にないの」ということらしい。
どうしても知りたかったら村にいる専門のアイルーに習うしかない、ということだ。
石と草と虫をくくりつけることが危険なのかと内心思ったが、村に着けば教えてもらえるらしいので今気にしてもしょうがない。

母さんの作ったものは、見た目すごい簡単そうだった。
そんな道具一つでこの世界を生き残る確率がぐっと増えるのである。
調合の勉強は絶対にしよう。そう心に誓うのだった。

そこまで話したので２０分。
そのあとは緊張と精神的な疲れからか、寝てしまったらしい。
アプトの進みがゆっくりなのは、眠った俺を起こさないようにしたのかもしれない。
起きたのはついさっきで、外を見れば、山がかなり近付いているのがわかった。

遠くにあった山々がもう見上げることができるほどに近くなっていた。
富士山のようなきれいな三角形ではなく、チョモランマのように山の途中から傾斜がかなり急になっているタイプの山だ。
標高はどれくらいだろうか、よくわからないが、雪が積もったままなのだからそれなりに高いのだろう。
山からの吹き下ろしの風なのか、草原では涼しいと感じた風もここでは肌寒い。

周囲は森だ。
ランポスたちがいた森と違って、木と木の間が広く、森の中にも光が届いている。
その木々の間に、これも幾多の人が踏み固めたのだろう土色の道が一本のびている。

周りを眺めていると父さんが手綱を繰った。
アプトは一本道からずれて土色の見えない、ぎりぎり竜車がはいれるかどうかといった場所を進み始めた。
道、とも言えないその道は、竜車で曲がろうとすればどこかに引っかかりそうだが、父さんが手綱を繰るとどこにも引っかかることなくスイスイ進んでいく。
目測的に絶対引っかかると思ったところも、どんな技術なのか引っかからない。
熟練の行商人はこんなことまでできるのかと、驚くことしきりである。

夕闇が降りてきて周りが見づらくなる中を何度か曲がったり進んだりを繰り返していると、急に視界が開けた。

開けた先、およそ２５ｍプール２つ分くらいの広場のようになっている場所の中央には、デフォルメしたアイルーを重ねたようなトーテムポールが刺さっている。
そしてその横には、ひげを生やして杖をついた、見るからに年寄りのアイルーを先頭に老若男女さまざまなアイルーが集まっていた。
一種異様な光景にたじろいでいると、父さんが御者台から降り、

「ごぶさたしています、村長」

と言いながら先頭に立つ老アイルー（村長）に手を差し出した。
村長はその手を握りながら、うれしそうに笑っている。

「久しぶりじゃのうジャック、元気にしておったか？」
「はい、おかげさまで行商も上手くいっています」
「それはよかった。所で、到着が予定よりも遅かったが何かあったのかのう？」
「途中ランポスに襲われまして。しかし息子と妻のおかげでなんとか助かりました」
「それはそれは、よかったのう」
あの父さんが敬語を話している！
商人なんだから当たり前なのだろうが、違和感がすごい。

父さんと会話を切り上げた村長は、こちらに顔を向けて笑顔をより深めた。

「ダイアナも元気そうで何よりじゃ」
「はい村長。おかげさまで元気にやっております」
「怪我はないかの？」
「ランポスにやられる私ではありませんよ？」
「ほっほ、そうじゃのう。なんせダイアナじゃからな」
ちょ、ダイアナだから納得できるって母さんいったい何者だよ。
ていうか、父さん母さんの名前が予想以上にかっこいいんだが。
なんで俺の名前はシラタキなのか……。
よりによって食べ物シリーズ。まぁこの世界にシラタキって食べ物はないんだろうけれど。

そんな事を考えていると、
「おぬしが二人の息子のシラタキじゃな」
「は、はい！」

「緊張せんでもええ。これからここがお前の故郷じゃ。よろしくのう」
「はい、よろしくお願いします！」
いきなり話しかけられたのでびっくりした。
返事が固くなってしまったが、お爺さんとは尊敬するべき存在だし、今の俺は2歳のアイルーなのできっとこれくらいでちょうどいい。

なんだか村長さんに微笑ましいものを見るような目で見られているような気がするが、きっと気のせいだ。
両親は後ろに集まっていた村人の歓迎を受けている。
と思ったら呼ばれた。紹介してくれるらしい。

「こいつが俺の息子のシラタキだ。厳しく指導してやってくれ」
父さんの声に「応！」という明るく勇ましい声が返ってきた。

「私の子だからっていじめちゃだめだからね？」
母さんの声には「お、おう」という若干腰の引けた声と女性陣の苦笑が返ってきた。
本当に母さん何してたんだ。
すごい気になる。
でもきっと気にしちゃいけないことなんだろう。背筋が寒くなるのは気のせいだ。
俺にとっては優しい母さん。それでいいじゃないか。

村の人たちは、両親の紹介に苦笑したりもしているが、そこに負の感情は感じられない。
明るくて元気そうな、居心地のよさそうな村だ。

これから最低でも1年ここで過ごすのだ、なじめればいいなぁ。

１―４．こんばんは（後書き）

さーって、村編どうするか全く考えてない。

変なとこあったらどんどん指摘してくださいね！

思いつきで書いてるので不安だらけです！

1―5．いってらっしゃい（前書き）

練り直しなんてなかった！

短いです。

誤字・脱字・指摘・感想大歓迎

1―5．いってらっしゃい

一通り歓迎を受けた後、もう夕方ということもあってそのまま歓迎会という名の宴会に突入した。
到着した時の広場はそのまま宴会場も兼ねているらしく、敷物をしいて料理や飲み物をそこに並べて準備万端。
村長が音頭をとり、それに合わせて村人が一斉に木のコップを頭上勢いよく突き出した。
宴会が始まった。
どうやら竜車の中の荷物は大半がこの宴会用だったらしく、あっという間に竜車の中身は減って行った。
ちなみに、アプトは村はずれの牧場の竜舎の中だ。
父さんも母さんも、昔馴染みのアイルーと話をしていて楽しそうだ。
俺も今は目の前の料理に集中しよう。

宴もたけなわ、宴会は酒が入っていることもあって、今最高の盛り上がりを見せている。
父さんは外の話を、俺を含めた男衆に話している。
なかなかに話し上手で、周りに陣取った男衆、特に子どもたちは父さんの言葉に一喜一憂している。
母さんのほうは男衆の壁に遮られ良く見えないが、たまに「わっ」と歓声があがるので、楽しくやっているのだろう。

そんな宴会騒ぎの中、俺は密かに安堵していた。
何にかと言うとそれは、
（料理が……美味かった！）
ということである。

今さっき食べていた料理は美味かった。
さすがにネギや刺激の強い香辛料は使われていないが、それ以外の食材はふんだんに使われている。
刺激の強そうな香辛料が使われていないため、味の強さはない。
しかし、食材の味と僅かな調味料で味付けされた料理は、朝に食べたものと比べてはるかに美味い。
焼いてあるチーズや肉に付けるジャム、ミルクに混ぜてあるハチミツも美味い。
もう、なんというか美味い。

この体の舌が雑だったわけではなかったのだ。
いや、むしろ前の体だったら刺激の強い味に慣れてわからなくなっていた繊細な味も、今なら分かる。
この世界で過ごしてきたこの体。味に対する繊細さは前以上だ。
（あぁ、俺はこの世界で生きていける……）
そう確信した瞬間だった。

1―5．いってらっしゃい

俺が満腹でうつらうつらしていると、両親が近付いてきた。
今日は同じ部屋で一緒に寝るらしい。
父さんに抱きあげられながら、宴会場の近くにある建物に入る。
睡魔と激しい戦いを繰り広げるも、意識の半分は既に負けていた。
俺を抱えている父さんの体があったかいことしかわからない。
そのあったかさが、より俺の睡魔を元気にさせる。

（俺の意志が弱いのではなく、睡魔が強いのだ）
そんな言い訳で意識が睡魔に完全降伏するまで残りわずかとなった時、両親の声が聞こえてきた。

「シラタキ。聞こえてないかもしれんが、今日が最後だ。今のうちに言っておく。
お前が生まれてからの2年間、俺は幸せだった。
お前がいるから俺は幸せだ」

耳に届く、低く響く声が心地いい。

「お前は俺たちの自慢の息子だ。毛の質は母さん似だが、毛の色は俺似だ。
顔も母さん似で悪くない、頭もいいほうだ。好奇心もあるし、ここの生活はきっと楽しいものになるだろう。
ただ、お前は少しため込みやすい。それに気づくやつがいないこの村で、お前が本当に楽しく過ごせるか、俺はそこが心配だ。
いいか、大人を頼れ。それだけだ。」

「お父さんったら口下手ねぇ。恥ずかしいのかしらね？」

クスクスと、耳をくすぐる優しい声が気持ちいい。

「あなたはお父さんと私の子だから、村のみんなにたくさん迷惑かけるかもね。
でも、あなたは頭がいいから、村のみんなに遠慮して、おとなしく過ごすかもしれないわ。
いい？シラタキ。遠慮なんてしちゃだめよ。遠慮なんてしたら、楽しいことが逃げちゃうわよ？

あなたは私たちの子なの。きっと大丈夫。
思う通りに、元気に過ごしてね」

すでにしゃべっているのが父さんと母さんだとわかるくらいにしか耳がはたらいていないが、声が耳に響くと幸せな気持ちになる。
その後も何か言っていたみたいだが、もう俺には聞こえていなかった。
ただ、その後一緒の布を被った時の温かさが、朝の温かさと同じだと気付いて、俺の意識は眠りに落ちて行った。

朝、起きると父さん母さんはすでに朝食の準備を始めていた。
挨拶をして、3人そろって朝食をとる。
相変わらず大雑把な味だが、昨日よりおいしく感じるのはなぜだろうか。
これもこの体の記憶なのかもしれない。
腹いっぱい食べて、両親の出発の時間になった。

両親はこの先の村で行商をした後、元の行商ルートに戻るそうだ。
この村に来れるのは半年に1回あるかないか、ということらしい。
父さん母さんに、この体に憑依したことがばれにくくなるのはうれしいが、やはりどこかさびしい気がする。
突き動かされるように、思わず2人向かって飛び込んで抱きついた。
父さんと母さんのぬくもりが心地いい。
しばらくそうしていると、父さんが腕を解き、そして母さんが離

れた。
どうやらここまでらしい。

「またな」「またね」
「いってらっしゃい」

俺は、両親が見えなくなるまで、そこで見送っていたのだった。

１―５．いってらっしゃい（後書き）

別れはあっさり風味？
伝えたいことは日常の中で伝えるのがアイルー。
最後に言うのは本当に伝えたいことだけ、という自分設定。
だってあいつら半野性だし。弱肉強食万歳な世界だし。

ちなみに、味に対する繊細さもチートによる味覚の上昇による副次効果です。
毎回母さんの大雑把料理を食べてて繊細さが鍛えられるわけないのです。

1―1（前書き）

かなりの、「かなりの」独自設定・歴史捏造ありというか独自設定と歴史捏造しか書いてない回。スルーしても大丈夫なはず、です。

誤字・脱字・おかしな所・感想　大歓迎！

1―1

両親と別れて、そのまま村長に連れられて村長の家に行くことになった。
今朝の若干の寂しさは両親が見えなくなったことでいつの間にか消え、今は村のことに対する好奇心がもたげている。

昨日は村に着いてすぐに宴会になったし、今日は両親を見てたので周りに目をやる余裕がなかった。
しかし今は違う。村長に連れられて歩いているだけで暇だ。
なによりここはアイルー村である！
道行く通行人はすべてアイルーで、コスプレとか劇団○季のキャ○ツとか着ぐるみとはちがう本当の猫である。
建物や道具も全てアイルー向けに作られたものなのである。

目に映るものに片っぱし興味が移ってしまい、顔をキョロキョロと動かしてしまう。

すれ違うアイルーの微笑ましそうな視線は、なんというか悶えたくなるが、それでも観察はやめられないのだ。

観察をしていて、まず目に着いたのはやはりアイルーだった。

ゲームでは何度も見たが、こうして実際に猫が2本足で歩いたり4本足で走ったりしているのを見ると、なんというか、和む。
アイルーが話しながら笑ったりするだけで、もうなんだか幸せな気分になれること間違いなしである。

そんな感想は置いておいて、アイルーは身長の差がほとんどなかった。
顔つきが凛々しいとか、なで肩とか、お腹が出てるとか、毛並みの質とかの差は結構ある。

しかし、身長という点で見ると、多少の差はあれだいたい同じくらいになっている。
極端に高い、低いということはなく、身長は平均１３０ｃｍくらいで、差は±５ｃｍってとこだろう。

そういえば前の世界の猫も、ライオンとか猫科ならともかく猫が極端に大きいとかは聞いたことはなかった。
きっとこんなものなのだろう。

身長の次は毛並みの色である。
両親は毛並みが黒と水色で、俺の毛並みは群青だが、村にいるアイルー達はほとんどがアイルーの基本色であるアイルー色をしていた。
たまに色の違うアイルーがいるが、色の種類はバラバラで規則性など見当たらない。

両親と俺の例から、毛並みは遺伝の影響を受けるのかと思ったが、そんなことはないのかもしれない。
いっそのこと、旅立ったアイルーが外の環境に与えられたストレスで毛の色が変わる！とかのほうが面白いかも……そんなことはないだろうが。

（まぁ、ゲームの中では“赤虎”や“マスカット”に“ゴールド”

とかも居たし、考えても意味ないのかもなー）

考えるだけでは限界があるが、この世界の生物がどんな仕組みをしているのかを調べるのも楽しいかもしれない。

この世界の生き物については改めて調べる、と決めてアイルーの観察を終わる。

この世界は確か研究職の居る大学とか、雑誌が出せるほどの印刷技術があったはずだから、研究結果を載せた本もいろいろあるだろう。

俺が観察して分かるようならきっと誰かがまとめているだろうし、そっちを見た方が手っ取り早い。

正しい知識はそっちで学ぶとして、俺は俺で適当にあれこれ考えて楽しむことにした。

アイルーから目を離せば、次に目が行ったのは建物だった。

アイルー村の家は、意外と言うべきか当然と言うべきか、ほとんどが木造だった。

木造といっても、いわゆる和式の木造ではなく、ペンションのようだと言えば伝わるだろうか。洋式のものが多い。

2階建なんていうものは無く、全て1階平屋建てである。

大きさはアイルーが生活するための大きさで、当たり前だが人間が住めるような大きさではない。

せいぜいワゴン車と同じくらいかもう少し高いくらいだろう。

ほとんど大きさに違いがないので、屋根の上を伝ってどこまでもいけそうである。

一つだけ他よりも大きな家があったが、それも一階平屋建てだった。

まるで拡大したかのように、建物の造りは一緒なのに巨大化している。

倉庫にしては小さいような気もするし、集会場にするには入口まで大きくするのはおかしい。

あの大きさからみて使うのはアイルーより４０~５０ｃｍ大きな生き物になるだろう。

もしかしたらアイルーにも突然変異ででっかくなっちゃったのがいるのかもしれない。

（考えて結論が出ることじゃないな。この村に居ればすぐにでもわかるだろう）

歩きながら考えるのには限度があるし、見えていた家もすでに後方に流れて行ってしまって振りかえらなければ見えない。

そんな状態で結論が出るわけもなく、いずれ入ってみよう。と考えるにとどめた。

そういえば、先ほどから歩いている道が狭い。

道幅は２ｍくらいで、歩いている分には狭いとは言えないが、両親が使っていた馬車を通そうとするとかなりギリギリな幅になってしまう。

この狭さは、森を抜けたときの村への道にそっくりだ。

この村に来た時に通った道は、特別狭いのではなく、アイルーにとってはアレが普通の幅なのかもしれない。

道はもちろん舗装されておらず土がそのまま踏み固まったもので、道端には草が生えている。
ただ、矢張り猫と言うか肉球の恩恵と言うか、アイルーは足下の小石や窪みにあまり頓着していないようである。
肉球の弾力と猫特有の身のこなしで地面の状態によって怪我をする、ということが少ないのかもしれない。

まぁ、地面を整備できるような知識も技能もないし、郷に入っては郷に従え、俺も気にしないことにしよう。

そんな風にいろいろと観察やらなんやらをしていると、他の建物がなくなり、一際大きい村長の家に着いた。
いや、これを家と言っていいものか。家というより樹だった。それもかなり巨大な樹だ。

樹齢何百年になるのか想像もつかないその巨木は、根廻りがおそらく３０ｍほど、幹廻りが２５ｍほど、樹の高さは５０ｍに達するだろう大きさである。
枝の一本一本が太く、その枝には青々とした葉が茂り、太陽の光を浴びて輝いて見えるほどエネルギーにあふれていた。

「すごいじゃろう？この村を守ってくださっておる樹じゃ」
「わしらはこの樹に集い、村を作ってきたのじゃよ。」
俺が口を開けたまま見上げていると、それに気付いた村長が微笑ましそうに顔を向け、そして誇らしげに話しだした。

なんでも、昔ご先祖様が住んでいた巨大な集落は山を崩すかのような大嵐によって一夜にして滅んでしまったのだという。
大嵐で死んでしまった仲間もいたが、生き残ったアイルー達はそれでもかなりの数だった。
住む家をなくした膨大な数のアイルーたちを受け入れられる集落はなかった。
新しい村を作ろうにも、そのころの生き物には強力なモンスターに太刀打ちすることはできなかった。
他の村に入るのも無理、新しく村を作るのはもっと無理。
しかたなくご先祖様たちは新天地を求めて海に出た。
流れ流れてたどり着いたのが今の大陸の西の端、今はメルチッタと呼ばれている場所だったというわけだ。

そこで村を作って幸せに暮らしました、で終わればよかったのだが、そうもいかなかった。
その頃はこの大陸にアイルーはほとんどいなかったらしい。
その珍しいものを人間が放っておくはずもなく、捕まったりした仲間もいたようだ。
捕まえようとする人間や、前の大陸にはいなかった強力なモンスターたちから逃れるために彷徨い、土地勘も無いまま続けた長い放浪生活に仲間はいつの間にか減り、残ったのはごく僅か。
疲れ果て、もう駄目だ、と思った頃にこの巨樹と出会ったのだという。

当時はこの森の近くまで人が入むことはほとんどなかった。
この森にたどり着くには大陸中部にある砂漠を越えなければならない。当時の人間にはその技術はまだなかったらしい。
モンスターも、万年雪の山と広い砂漠と広い草原に囲まれた森には小型の生物か小型のモンスターしかおらず、餌が居ないことで巨大なモンスターはやってくることがほとんどなかった。

大陸の中にぽっかりと空いた安全な場所、それがこの巨樹のある森だったのである。
もちろん、元々居た小型のモンスターとの縄張り争いや数年に１度くるモンスターとの戦いもあったが、そこは前の大陸の時を含めても比べ物にならない良い環境だったのだ。

いつしかアイルー達はこの森を目指し、この樹に寄り添い、この樹から旅立って行った。
そうして生活していると、旅立ったアイルー達から大陸各地に他にもアイルーの村が幾つかあることがわかり、交流をとり、大陸中にアイルーが広がって行った。
数百年の時をかけアイルーは大陸に馴染み、今の生活を手に入れたのだ。

「この村は、この大陸に生きるアイルー達の祖先が作った、古き村の一つなのじゃ」
村長はそういうと、樹の根元に作られた扉を開け、俺の方を向き、
「伝説の地へようこそ、じゃよ」
そう言っていたずらっぽく笑ったのだった。

１－１（後書き）

私はファンタジーものの映画とか大好きなんです。
とくに樹の中に作られた妖精の家とか、もうたまりません！！
そんな妄想が今回の村長の家に反映されました。
３ｒｄの渓流にある破壊された村と無理やり結びつけてこんな話ができました。
巨樹に気付かなかったのは村に着いた時はすでに薄暗かったとか、目先のものの観察で忙しかったとか、そんなところで勘弁してください……。

ちなみに樹のモデルは、親戚のうちの近くにある宮崎県の「清武の大楠」
中が空洞化していて、地域の子たちと寝転んだり楠の中を登ったりしたのを覚えています。
今は入れなくなったみたいで残念。

1―2（前書き）

独自設定あり

誤字・脱字・おかしな所・感想　大歓迎です。

1―2

村長は家（樹？）に入ると、俺を手近な筵（むしろ）の上に座らさせたあと、少し待つように言ってその場を離れた。

村長が角を曲がり姿が見えなくなってすぐ、樹の中の観察を始めた。

まず圧倒されるのは天井の高さだろう。

天井までの高さは６ｍくらいはあるのではないだろうか。

６ｍといえばビル２階分くらい。アイルーで言えばかなりの高さになる。

さらに壁の２~３ｍ位からあちこちに、おそらく枝が枯れて空洞となった大小さまざまな穴が開いており、そこには扉のようなものが取り付けてあった。

今は開いているそこから外の光が入って、何とも言えない幻想的な風景を作っている。

壁の肌触りは意外にも滑らかですべすべしている。

樹のささくれなどどこにもない、高級な机に使われている樹のようにつるつるだ。

滑らかな表面は光を流し、樹の内側にやわらかな光を分散しているようだった。

ノックのように軽く叩いてみれば、叩いた力に比べて返ってきた音が小さい。

表面の乾いた所が返す音はあるのだが、叩いた衝撃は大部分が奥に吸収されたようで、その手応えは、まさに樹木を叩いたそれだっ

た。
その深みのある弾力はこの壁が厚く、そして強靭であることを伝えてくる。
あの巨大な樹冠を支えるこの壁の厚みは数十ｃｍではきかないだろう、場所によっては２ｍ以上あってもおかしくない。
その厚い壁の中を今もなお水が通り、この樹に行きわたっているのだ。
内側が空洞になっていても、この樹は立派に生きている。
中を水が通り、年月を樹皮という形で何層にも重ねたこの壁は、おそらく断熱性も抜群だ。
近くに雪山のあるこの土地で、厳しいと思われる冬もこの樹に守られながら乗り越えてきたのかもしれない。

村長が去って行った方に目を向ければ、空洞の中に仕切りがあり、竈や水瓶などがある料理ができる部屋が見えており、そこからさらにいくつかの部屋に分かれているようだ。
きっと寝室とか、生活に必要な部屋になっているのだろう。

今いる部屋は大きなカーペット（絨毯？）が敷かれており、その上に幾つかの筵が置いてあるだけだ。
壁際には筵がまだあるみたいだし、大人数で話し合いにでも使うのかもしれない。

外から見た感じだと部屋はこれだけだろうし、今いる部屋がこの空間の大半を占めているみたいだ。
村長だから裕福な暮らし、というわけでもなさそうだ。

壁には縦２ｍ横１ｍほどの大きな盾形ペナントのようなものが掛かっており、壁際にはタンスのような家具も見える。
赤を基調として、中央に大きくアイルーを刺繍されたペナントは

茶色く変色しており、家具も新品の輝きはなく、使い込まれたこげ茶色をしている。
それらが壁となっている樹によく映え、長い年月を感じさせるとともに、まるでファンタジー映画の中に登場する部屋の中に居るような雰囲気が感じられる。

（まぁ、映画の1シーンというかゲームの1シーンになるんだろうが）
２０年以上の人生経験はどこへやら、俺は子どものように目を輝かせ村長の家の魅力に引き込まれていた。

古い木造の学校にある古い図書室。
そこに整然と並べられ、ただそこにある茶色く変色した本たち。
窓からは光が差し込み、光の道筋が窓際に置いてある机と椅子に降りかかっている。

古い図書館が持つ、あの独特な、静謐と言っていいほどの空間が今この場にはある。
そして、そのような空気はおれの大好物だったのだ。

しばらくその空気を堪能していると、村長が戻ってきた。
村長の後ろには４人のアイルーの姿があった。
４人とも毛の色はアイルー色なのだが、背恰好がだいぶ違う。

右端のアイルーは、アイルーとしては破格の大きさだろう。他のアイルーから頭２つ分くらいは高い。
おそらく１５０ｃｍ以上の体に、「力が強いです！」と自己主張してきそうな筋肉を搭載している。

イメージ的には、〇ブリの「猫の恩〇し」に出てきた太った猫「ムタ」を筋肉質にして明るくした感じだろうか。
ボサボサで先の縮れた、鉄と炭と汗と焦げた毛の匂いのする毛並みを持つ男性のアイルー。
ピンッと張ったひげと力強さにあふれた瞳が、そのエネルギッシュさを過分に表現していた。

その隣のアイルーは、打って変わって柔和そうな顔をした、平均の１３０ｃｍほど。
猫が日向ぼっこをしたあとの太陽の匂いと、濃厚な土の香り、それと他の動物の臭いのする、やわらかな毛並みをもった、こちらも男性のアイルー。
目元は糸目でたれ目、幸せそうな顔をしている。ひげも柔らかく垂れ、口元は緩いカーブを描いていて無駄に幸せそうである。
イメージ的にはまさにアイルー。そのアイルーを幸せそうにした感じだろう。
これだけだとひ弱そうに見えるが、地にしっかりと足をつけ、それでいて軽やかに歩くその姿は、猫の持つ柔軟さと力強さを感じさせるものだった。

そのさらに左に並ぶアイルーは、先の二人には持ち得ない、見る者にやわらかさとしなやかさを連想させる肉体と艶のある毛並みを持つ女性のアイルーだ。
スラッとしているが、女性らしい丸みも帯びた、おそらくアイルーの女性として理想的な身体だろう。
見た目は、やはり〇ブリの「猫の恩〇し」にでてきた「バロン」の女性版と言ったところだ。スーツは着ていないが。
若干ツリ目がちで、勝ち気そうな印象を受ける。
その毛並みからは多数の草や石の匂い、それに薬の独特の香りと少しだけだが強烈な香辛料の匂いが漂ってくる。

最後のアイルーも女性だ。
こちらは、なんというか、肝っ玉母ちゃんを見事に体現したお方だった。
背恰好の説明は「肝っ玉母ちゃん」をそのままアイルーにした感じだと考えてもらえばいい。
他の3人に比べて毛並みのうるおいが少ないのかぱさついていて、周りより年上だとわかる。
多くの匂いが混じっていて、どの匂いが何の匂いかの判別は難しいが、その匂いが一番「生活の匂い」で、安心できるような匂いだった。

「待たせたの。四人を呼ぶのに時間がかかってしまって遅くなってしもうた。ほれ、みな挨拶せい」
村長が声をかけると、いちばん右の筋肉アイルーが近付いてきた。
「ちっこいな坊主！今日から鍛えてでかくしてやるから覚悟しとけよ！
この村の鍛冶の親分をしてるガロンだ！よろしくな！」
俺の頭をグリグリと撫でながら重低音な声でやたら元気にしゃべるガロンさん。
（痛っ！痛いって！首が折れる！）
大きな声で元気よく。そこだけ聞くとまるで見本のような挨拶なのだが、俺の頭をなでるというよりこねるといった感じでグリグリするものだから俺の首は早々に悲鳴を上げていた。
頭がガックンガックン振り回されているので上手く言葉が出せな

い。
俺が抵抗しても、気づいていないのか片手で押えこまれるその腕力は、まさに鍛冶師という職に相応しいものなのだろう。
（でも今は俺が死にそうです！誰か助けてー！）
「ガロン、シラタキ君が辛そうだよ。やめないか」
俺が心の中で悲鳴を上げるのと同時に、ガロンさんを止めてくれたのは、柔らかな男性の声だった。
ガロンさんは初めて俺がきつそうにしてるのに気がついたみたいで、「おぉ！すまん！」と言って手をどけてくれた。
ガロンさんは要注意人物だな。気をつけよう。
「大丈夫だったかい？ガロンは仕事以外の力加減が苦手でね。ああ見えていい奴なんで嫌わないであげてくれるかな？」
ああ見えて、と言うところでガロンさんを見れば、若干肩を落として落ち込んで？いるようだ。
ガロンさんを止めてくれたもう一人の男性アイルーの言葉に頷くと、視界の端でガロンさんがホッとしていたのが見えた。
きっと子ども好きなんだろう。あの過剰なグリグリもスキンシップのつもりなのかもしれない。
……悪い人ではないんだろうけどなー。
「よかった。これからこの村で生活していくんだ。嫌われなくてなによりだよ。
僕は農場の経営をしてるギルバートって言うんだ。よろしくね」
屈んで俺に目線を合わせ、落ちついた声でそう言ってくる俺を助けてくれたギルバートさん。
すかさずガロンさんのフォローをしたところを見ると、結構付き

合いが長いのかもしれない。

「首は大丈夫そうだけど……。ケーナ、診てあげてよ」

ギルバートさんが声をかけたのは、残ったアイルーのうち、薬の臭いのする女性。

いつの間にか添えられた手で首と頭を軽くゆらして俺の反応を見ている。

真正面から観察してくるその真剣な瞳に気圧されてしまった。

「大丈夫ね。どこも傷んでないわ」

「へぇ、ガロンのアレで平気なんて丈夫なんだな」

「そうね。私の出番はあまりないかも。良いことだけどね」

顔と視線を俺に向けたまま、ギルバートさんと話すその顔はどこまでもクールだ。

（アイルーにもクールビューティーという言葉はあてはまるんだろうか？）

「調合師をしているわ。ケーナよ、よろしくね」

「ケーナは調合以外にも診察やなんやらをしてくれてるんだ。ちょっと人付き合いが苦手な所があるけど、いい子だから仲良くしてね」

挨拶を終えるとすぐに離れて行くケーナさんとそれを俺の横でフォローするギルバートさん。

去り際までクールなその姿は、きっと村の男衆の憧れに違いない。などと考えながらついに出てきた「調合師」という言葉について考える。

どうやら俺の目標は、まずはケーナさんに指導してもらうことになりそうだ。

ケーナさんが俺の前からどいたことで、今まで隠れていたガロンさんが目に映った。
なにやら残った肝っ玉アイルーに説教されている。
ケーナさんが話しかけると、説教を止めて俺の方に向かってきた。
ガロンさんはギルバートさんに頭を小突かれてうなだれているが、ここは見なかったことにしておこう。

「あの馬鹿がすまんねぇ。何度言っても治りゃしないんだよ。
私の名前はココロ。村の母ちゃんとは私のことさ。ダイアナにいろいろ聞いてるよ。よろしくね。」
ニコニコしながら、頭をなでてくる。
ガロンさんとは違い、つぼを心得た気持ちのいいなでなでだ。

（これは、いいものだ……）
俺がその熟練の技に陥落しそうになっていると、
「あのダイアナに子ができて、その子がもう村に来る年とはねぇ。月日が経つのは早いもんだ」
とつぶやいた。
どうやら母さんの若いころを知っているらしい。
ココロさんは他の3人に比べて年配みたいだし、他の人も頭が上がらないのかもしれない。

「紹介はそんなもんでええじゃろ。シラタキや、この四人がお前を鍛えてくれる人たちじゃ、挨拶せい」
「はい！今日からこの村の一員になりました、シラタキです！ご指導よろしくお願いします！」
村長の言葉に応え、挨拶をして勢いよく頭を下げる。
挨拶はどこに行っても大切なものだ。

これが出来るかできないかで、その後の人間関係がスムーズにいくかどうかが決まる。
今はアイルー関係だけど、これは変わらないだろう。

頭を上げるとみんな驚いたような感心したような顔をしていた。
あー、二歳児の挨拶じゃなかったか。
いいや、両親に鍛えられたってことにしておこう。

この世界を楽しむために、頑張って生き残る。
この村でその方法を学びつくしてやる！

１―２（後書き）

前の話とまとまってたんだけど、前の話が独自設定オンパレードなので分離。
こっちも独自設定だらけとか言わないで……。

村編は村長とこの４人について行って勉強することになります。
今まで以上の独自設定がもうわんさか。になる予定（プロットなんてない）

できるだけ世界観との齟齬と設定の矛盾を無くすつもりですが、見つけたらドンドン指摘してください。

1―3（前書き）

えー、お待たせしました。
短いですが続きを投稿させていただきます。

1―3

学びつくしてやる！と意気込んだはいいものの、今日は特にやることはないらしい。

顔合わせの後はこれからことについての説明があった。
今日から1年はココロさんの家でお世話になりながら、ガロン・ギルバート・ケーナの3人の仕事を体験するために研修のようなものをするらしい。
それぞれの仕事を体験して、一通り勉強していくのだとか。
一通りやってみた後に才能がありそうな仕事に就かせるという風にやって行くらしい。

決まった仕事に就くには最低でも半年の研修が必要だということなので、その間に3人＋ココロさん＋村長さんの5人で話し合って決めるんだろう。

まぁ生まれて2年目の子どもにいきなりどれをやりたいか、なんて聞くのは無茶だろうし、この方法なら仕事場で働く人と仲良くなれるし、村の中を回ることになるので村に慣れるのも早いだろう。

説明もささっと終わり、今日はこれからココロさんといっしょに村を回ることになった。

ギルバートさんは農場へ、ケーナさんは薬作りと往診に、ガロンさんは鍛冶以外にも土木業等の力仕事のまとめ役をしているらしくそっちに。
残ったのは肝っ玉母ちゃんことココロさん。

ココロさんは村の女衆のまとめ役でもあるから顔も広い。
これから一緒に住むことになるのだし、村中歩き回って仲良くなれ！というわけで、案内役にもってこいということだ。

「それじゃシラタキ、行こうかね」
「はい」
ココロさんが差し出した手をとって俺たちは歩きだした。

村はなんというか村だった。
人は多くも少なくも無くそこに住む人たちは優しくて、まさに牧歌的という感じだ。
この形は円を３つ重ねたような形で、巨樹を中心に１０ｍくらいの距離を置いて住居が建ち並び、その外側に広場だったり倉庫だったり農場だったりがある。
住居は巨樹を囲むように円状に建てられ、家と家との間はせまくて２０ｃｍ、広くても８０ｃｍくらいの間隔で建てられ、その路地は入り組んでいて簡単な迷路のようだった。

村の一番外側は柵で囲まれていて、東西南北には大きめの門が作られていた。
柵の向こうは５ｍくらいの空白地帯があり、そこからは森に囲まれている。
予想していたような堀は無く、柵は頑丈だったがそれだけだ。
モンスターが攻めてきたときに大丈夫なのかココロさんに聞くと、
「大丈夫だよ。この村はモンスターなんかにゃ負けないさ」
と自信満々に胸を張って笑った。
答えになって無いなぁと思ったがココロさんがあまりに自信満々な

ので大丈夫なのだろうと納得しておいた。
ここでさらに聞くと怖がっているように思われて負けた気がするから聞かなかったわけではない。断じてない。

太陽が沈み始め夕方になった頃にようやくココロさんの家についた。
初めての場所で初めての人たちと子どもらしい言動で対応していたため終始気がぬけず無駄に疲れた感じがする。
出会う人出会う人良い人だというのはそりゃもう伝わってくるのだが、ココロさんの紹介のたびに撫でくりまわしたり抱きついてきたり（女衆）振り回したり高い高いしたり（男衆）してくるものだから肉体的にも精神的にも疲れた。

イスに座ると、どっと疲れがのしかかってくる。

「ふぃ～」
「お茶でも飲んで温まりな」
思わずもれた息と同時にココロさんがお茶をテーブルに置いてくれた。

「ありがとうございます」
お礼を言って一口。
程よい温かさとなったカップは冷え込んでいた肉球を温め、どこか懐かしい香りが無駄な力を抜き、少し熱めのお茶は体の中に広がると凝り固まった身体をほぐしていくようだ。
思わず「ほふぅ……」と息が漏れた。

季節は春の終わり頃とは言え、雪山からの風が吹くこの村は結構寒い。
村の中で会ったアイルー達は体中の毛が広がり、もさっとした外見をしていた。

思わず何人かの毛皮に手を埋めてしまったのは恥ずかしい思い出だ。
そんな俺の行動を村の人たちがにっこりして受け入れていたり、よりスキンシップを激しくなったりしたことが、俺の大人としてのプライドというか精神的な何かをガリガリと削っていた。
きっと成アイルーになった時に「きらきらした目で毛皮に手を埋めてたシラタキ君がこんなに立派になって」とか言って俺の精神を時間差で削ってくるに違いない。
嫁さんをもらうかどうかはわからないが、もし嫁さんがそれを聞いてたらきっとおれは死ぬだろう。
ま、まぁ俺は子アイルーだし、子どもみたいな行動をしても当たり前のことだ。
だから恥ずかしいことなんてないんだ……無いはずだ……。

「どうしたんだいシラタキ、うつむいちゃって。ねむくなっちゃったかね？」
はっとして顔を上げればココロさんがちゃぶ台の反対側から俺の顔を覗き込んでいた。
その顔は心配しているようでもあり、微笑んでいるようでもある。
どうやら俺が自分を正当化している間にちょっと時間が過ぎていたみたいだ。
もしかしたら少しまどろんでいたかもしれない。

「ちょっとつかれちゃいました」
「村の外から来る子は久しぶりでみんな興奮してたからねぇ。明日からはそんなことはないから安心しなよ。
それでどうだったね、楽しくやっていけそうかい」

「はい！」
間髪入れずに返事をした俺の顔は、きっといい顔をしていたと思う。
なぜなら、ココロさんの顔が嬉しそうな笑顔に変わっていったから

だ。

「みんないい子たちばかりだからね。何も考えずに楽しく過ごせばいいさ。
今日みたいに遠慮なんてしちゃダメだよ？」
笑顔は笑顔だが、どこかからかいを含んだ笑みに変わった顔を俺に向けながらそう言った。
どうやら俺がいろいろ考えながら村人と話してたのは見抜かれていたらしい。
ココロさんはからかった風で軽く言っているが、その眼には確かに優しさが込められているのがわかる。

この分だと他の人たちにも見抜かれていたのかもしれない。
たかだか２０数年生きただけでは、この厳しい世界に生きる人たちからすればまだまだ精進が足りないようだ。
ただ、見抜かれているのに悔しさなどは無く、嬉しさや気恥かしさが湧いてくるのはなんだろうか。

「はい」
すこし照れ臭くて俯いた俺の返事がつぼにはまったのか、ココロさんは声を出して笑ったのだった。

この後ガロンさんを筆頭に村人が来て「ようこそ！これからよろしくね会」をしてくれたのだが、男衆がそれはもう「歓迎」してくれた。
（毛皮と精神的に）ボロボロになった所を助け出され、イスに座らされた。

やり過ぎだと女衆に怒られる男衆を見ながら、酒が入った男衆に近付くのは危険だ、とぼんやりと考えていると、だんだんねむくなってきた。

明日から楽しく過ごせそうだと感じながら、俺はいつの間にか眠りに落ちて行ったのだった。

1―3（後書き）

1か月以上間を開けての更新です。
忙しかったとか言い訳はあるんですが、何も考えずに書いてたので詰まった、というのが一番の理由です。
まぁ、考えてもなにも出てこなかったのでやはりそのまま行きます。
これからもこんな感じの更新になるかもしれません。
どうかよろしくお願いします。

１―４（前書き）

誤字脱字ありましたらよろしくお願いします。

1―4

目覚ましに起こされ、自分に関係のあるのかないのかわからないニュースを見つつ朝食をとり、電車に揺られ出社し、スケジュールをこなし、家に帰ってテレビやらゲームやらを堪能しつつ酒を飲む。
映画のスクリーンのような四角の幕に映る光景が、いまはとてつもなく懐かしく、同時にひどく遠いものだと感じる。
なぜそう感じるのかわからない。あれは俺の日常のはずだ。
でも遠い、手を伸ばしても届かない。走り寄っても近付かない。

俺の日常は暗闇にただ浮かび、そこにある。

あぁ、周りは暗闇だったのか。そんな事を考えながら走るが、スクリーンはただそこにある。
疲れからか諦めからか立ち止り、身体ごと動かして周りを見渡せばそこにはただ暗闇が広がっているだけだった。
後ろを振り向いてみれば、そこにはただ暗闇が広がるばかりで、俺の走ってきた跡も何もない。

スクリーンに背を向けて眺めていると、ふと想像してしまって振りかえれなくなった。

もし、今振り返ってそこに何もなかったら……。

良くわからない恐怖が体を縛り、体はピクリとも動いてくれなくなった。

暗闇の中、背後からの光を受ける手足がまだそこに何かが映っていると教えてくれる。

それでも、

振り返るのが怖い。

でも振りかえらなくては。

どれくらいの間逡巡していただろうか、長いような短いような時間が過ぎ、いざ振り返ろうとした時、

「……、……」

声が響いた。

声は光を伴って世界に波うち、暗闇を覆い隠していく。

結局俺は振りかえることができないまま、そのまま光に呑まれた。

「…タキ、起き…、朝…シラタキ」

呼ばれる声にまぶたを開けると、暗い世界にぼんやりと誰かの姿が浮かぶ。

「お、起きたね。おはよう」

「お…はよう」

「おいで、顔を洗いに行こう」

そう言って伸ばされた手を取ると、被っていた毛布から連れ出された。

ぼんやりとした頭で歩く。

(あぁ、俺は寝てたのか)

(なんだか、嫌な夢を見ていた気がする)

手を引かれながら歩く俺の頭に浮かんだのは、そんなことだった。

「〜〜〜〜〜ッ！！」
寝ぼけ眼でぼんやりしていた俺の手にものすごく冷たい何かが触れて出たのは、そんな声にもならない悲鳴だった。
先ほどまでの眠気やぼんやりはどこへやら、覚醒した頭で状況を確認すれば、周りは薄暗く、俺の手は水のたっぷり入った水桶に突っ込まれていた。
水に浸かっている手を認識した瞬間、掌から伝わる冷気が体中にしみ込むような感覚とともに身体が震え、慌てて水桶から引き抜いた。
どうやら悲鳴を上げても体勢を崩さなかったらしく、気づくまで水桶に入れっぱなしだった手は冷え切っていた。

「ほら、早く顔洗って。」

そこで初めて他に人がいたことに気付き、声のした方に目をやるとすぐ近くにココロさんがいた。

覚醒はしたが、元々寝起きの頭は一連の流れで真っ白になっておりはうまく働かず、言われたことを無意識に行動に移し、よどみなくすくった水を顔にぶっかけた。

「おぁぁ！」
「何やってるんだい。水を顔にかけたらそりゃぁ悲鳴も出るよ」
「え、顔を洗うんじゃ……」
「顔を洗うのに水をかける必要はないでしょうが」
「……？」

冷たい水を顔面に受け、変な悲鳴を出した俺に変なものを見たという声でココロさんが話しかけてくる。

俺は顔を洗えと言われてやったのだが、どうもココロさんが言う「洗う」は意味が違うらしい。
はてな、と俺が固まっているとココロさんが手を猫手にして顔をこすり始めた。
それを見た俺の口から思わず、「あぁ～」と声が漏れた。

猫が顔を洗うと雨が降るといったことわざがあるが、別に猫は顔を水に突っ込んで洗ったりするわけではない。
自分の前足をペロペロと舐め、その前足で顔をぬぐうように動かす姿が顔を洗っているという風に言われている。
実際に猫は湿気があまり好きではないようで、雨の湿気でひげがしんなりしないように顔を洗ったりするのであながち間違いでもないことわざである。
他にもストレスを感じたときなど、イライラを発散させるためにもやっているらしい。

閑話休題―《話を戻して》。

俺の考えていた顔を洗うは前の俺がやっていた手ですくってバシャッとかけてタオルで拭う、だった。
しかし今の俺はアイルーなのだ。
顔を洗うもアイルーの行動でやらねば変な不都合をこうむることになるだろう。
具体的には、今まさに水を浴びた毛がべったりと顔に張り付いて断熱効果がなくなり、雪山のふもとの冷たい空気が俺の顔にダイレクトアタックをかましていることだとか、予想よりも多くかけた水が身体を伝ってお腹の方にまでしたたり、冷たい空気の攻撃範囲が俺のお腹まで広がっていることだろうか。

納得と考察によって冷静になった頭は忘れていた冷たさまで認識

させ、いつの間にか布を取りに戻っていたココロさんがやってくるまで、顔や腹からしみ込む冷気に震えているのだった。

家の中に戻り、今はイスに腰掛け朝食が来るのを待っていた。
猫の、いやアイルーのすごいところだろうか、顔を布で拭うとあら不思議、べったり張り付いていた毛は元気を取り戻して立ち上がり、濡れ猫から濡れかけ猫に進化することができた。
まぁ毛が乾いて元の柔らかい毛に戻ったわけではないので、冷気のダイレクトアタックは弱まっているが止まっていない。
そんな俺を見てココロさんが座っておけと言ったのでこうして座って待っているのだ。
頭に布を被ったままで。
どこの不審者かって感じだが、前と今の違いに悩んでいる俺の顔は変な顔になっているだろうから、それを隠せる布はちょうどいい。

（あ〝ー、まさか日常生活あんな風に違いがあるとは。もしかしたら俺の気付かないうちにいろいろとやっちゃってるかもしれないなぁ。
どうにかしてこの違いを埋めていかなきゃいけないんだが……
……俺まだ2歳らしいし、今おかしな行動しても大丈夫、なはず！
よし、解決！）
まさに俺。考えなしなところが実に俺らしい。

実際問題、自分の持つ常識で行動するしかないので考えても意味がない気がする。
言われたことだけやってればいいのかもしれないが、言われたことをやるときに常識外の行動をするかもしれない。
なにしろ何が正しい行動なのかこちらの常識がない俺にはさっぱり分からないのである。

自分から行動しても変な行動、言われたことをやっても変な行動。
どっちも変わりがないのなら受け身でいる意味がない。
だから考えても意味無い、下手の考え休むに似たり、なのである。

そんな風に悩んでいるのか悩みを投げ捨てているのかわからないことを考えていると、腹を刺激するいい香りが漂ってきた。
ココロさんが用意してくれていた朝食だ。
ちなみにさっき外に出たのは食事の前の手洗いのためである。
キッチン（石造りの竈と台があるだけの簡素なもの）からココロさんが鍋をもってきてテーブルの真ん中に置く。
もう一度戻って今度はサラダと木皿をもって戻ってきた。
鍋の中身をそれぞれの皿に移して目の前に置いてくれる。
料理は温かく、出来たてのようで腹が鳴るのがわかる。
それをにやにやしながら見ているココロさんは気にしないようにして、一緒に合掌、いただきます。
朝食は昨日の歓迎会で出されていた野菜を煮込んだスープに干し肉を入れたものとポテトサラダのようなものだった。
スープは母さんが作ったものによく似ていたが、それよりも味がまとまっている感じがして美味い。
食欲を誘ういい香りにまとまっているけれど口の中に優しく広がるまろやかな味、干し肉から出た肉の旨みもきつすぎず調和している。
ポテトサラダは調味料をほとんどいれていないようなのだが、温かいポテトのほくほくの食感にほのかな塩味と混ぜ込まれたきゅうり？がアクセントとなって美味い。
昨日は騒がしくてじっくり味わえなかったが、味わって食べるとたまらなくうまい。
やはりこの体になって良かったとしみじみと思うのだった。

「シラタキ、今日の予定を確認しようかね」
「えっと……」
食事を終え食器の処理も終わった後、ココロさんがそう切り出してきた。
実は昨日の歓迎会の印象が強すぎて何と言っていたかどうにも思い出せない。
「本当だったら昨日のうちに確認するつもりだったんだけど、昨日はあいつらがきて馬鹿やったから説明できなかったからね」
どうやら思い出せないわけじゃなく言われてなかったみたいだ。
「朝ご飯を食べたらそのままギルバートの所に行くんだよ。
ギルバート所に行ったら言われたことを頑張る。終わり」
「え、終わり？」
「終わり」
頷きながらこちらを見てくる。
本当にそれだけ？え、何これ、試されてるのか？
「ギルバートの家まで一緒に行くけど、明日からは一人で行くことになるからね。ちゃんと覚えるんだよ」
「あ、はい」
「じゃあ行こうか」
そう言って席を立つココロさん。
あれ？本当にそれだけ？
何が何やら流されるままに家を出てココロさんに連れられてギルバートさん宅へ向かう俺だった。

アイルー村の朝は早い、と実感する。
まだ夜も明けきらぬうちから結構な数のアイルーがココロさんと俺に挨拶をしてくるのだ。
道行く人達とあいさつを交わしながらしばらく歩くと、とある一

軒の家の前でこちらを向きながら立っている柔和な顔立ちのアイルーが見えた。

「お、いたいた。おはよう！ギルバート！」

俺がギルバートさんに気付いてしばらく歩くと、ココロさんもギルバートさんに気付いたのか大きめの声で声をかけた。

「お、いたね。おはよう！ギルバート」

「おはようございますココロさん、シラタキ君」

「おはようございます」

一日ぶりのギルバートさんは相変わらずニコニコとした顔であいさつをしてくる。

前と変らない、こっちまで幸せになりそうな顔だが、前とは違って首の後ろに麦わら帽子を垂らしている。

一見してひ弱そうに見えるのにその麦わら帽子に違和感がないのはきっともう体の一部となるくらい付けているからなのだろう。

「それじゃ、後は頼んだよ。しっかりと鍛えてやんな」

「任せてください」

「よし。シラタキもがんばるんだよ。それじゃあね」

「あ、うん。ココロさんありがとう」

俺の言葉に笑顔を浮かべて頭を火と撫でするとココロさんはそのまま帰って行った。

「それじゃぁシラタキ君、行こうか。やることは歩きながら話そう」

「はい。よろしくおねがいします」

ギルバートさんはうん、と1つ頷いて俺の手をとるとゆっくりと歩き始めた。

１―４（後書き）

あけましておめでとうございます。
待ってくれていた方がいたかわかりませんが、久しぶりの投稿です。
村編での方向性は決まったので、これから少しはペースを上げれるのではないかなーと。
ペースも何もまだ話数自体少ないですけどね。
今年もよろしくお願いします。

1―5（前書き）

誤字脱字ありましたらよろしくお願いします。

1―5

話しながら農場に向かって歩く。
内容は、「昨日はよく眠れたか」とか「朝のご飯はおいしかったか」等のたわいもない雑談から始まり、今は仕事内容を一通り説明してもらったところだ。
仕事内容は簡単にまとめると、農業、牧畜、川での漁、森での採取の４つに分かれていて、それぞれで仕事をする、ということだった。
４つの仕事は厳密に分かれているわけではなく、手が足りないところに応援に入ったりと結構アバウトな感じになっているらしい。
それらの仕事をまとめているのがギルバートさん。何気に大忙しな人なのである。

今日から俺がやる仕事は、主に農業の仕事らしく、暖かい季節になる前に農地を耕して地下と地上の土の入れ替えをするのだとか。

そんな話をしつつ着きました農場。
村の南側、陽が良く当たる場所に農地が広がっていて、結構広い。
小学校グラウンド１つ分とったところだろうか。
さらにその向こうには草地が広がり、そこには飼っている家畜を放牧するのだとか。

同じ仕事場で働く人たちとも顔合わせをすませ、いざ仕事と言うところで木のクワを渡された。
「あの、ギルバートさん。どうして木のクワなんですか？他の人は金属のクワを使っているんですけど」
木のクワとは柄から刃先まで、文字通り全てが木で出来ているクワだ。

他の人のクワは柄が木の棒であることは同じだが、刃先だけ鉄にしたものであったり、白い何かを取り付けているものであったりしている。
刃全体が鉄の物はかなり少ないようだ。

「あぁ、そういえば説明してなかったね。なぜシラタキ君に木のクワを渡したかと言うとね……、そうだ、ちょっと考えてごらん」
「え、あの、木のクワを使う理由？」
「そうだよ、ちょっと考えてみて」

これはかなりの無茶ぶりではないだろうか？
見た目まだ2歳の俺になんという質問。まぁ、言われたからには考えてみるが。

普通の子どもならここで「子どもだから？」と答えるのだろうが、見た目は子ども中身は大人？な俺は一味違う。
思い出してみれば、大人は使えて子どもが使えない物の筆頭として包丁があげられるだろう。
それはなぜ使えない、いや使わせてもらえないのか、それは、

「……危ないから、ですか？」
「おー、おしいね。半分正解。でもちょっと違うんだなあ」

違ったらしい……。でも本気で感心したような声を出されると、ちょっと得意げになってしまうのは仕方がない、よね？

「正解は「重いから」、でした」

答えを聞けば当たり前というかなんというか。なぜ思い当らなかったのかが不思議なくらいだ。

そうだよなー、包丁確かに危ないけどまず子どもだと重くてしっかり持てないから、そこからだよなぁ。
今の俺はアイルー2歳児、木のクワはよほど軽い木材でつくられているのか重いとは感じないが、鉄のクワはまず無理だ。
ただでさえ重いのに重心が外側にあるせいで持ち上げることすら困難かもしれない。

「ためしに持ってみるかい？」と言うので持たせてもらったが、案の定フラフラしてそのまま地面に鍬が突き刺さった。
子アイルーの体には厳しい重さだったみたいだ。

ちなみに一部の人のクワに使われている白い何かは竜骨らしい。
木＜竜骨（小）＜鉄と言った感じの重要度なのだとか。
竜骨（小）は森の中でも拾えるし、安く手に入れることも出来るらしいので鉄よりも安価なのだとか。
竜骨を手に入れるのは、ゲームの中でも骨のありそうなところを漁れば簡単に手に入ったし、安価なのはわかるんだが、放っておけば勝手に増える資源扱いのようで、ちょっとランポスに同情した。
手近にあるものは何でも使う、そこは人間もアイルーも変わらないようだった。

それでは初仕事の開始である。
最初にギルバートさんに構えや振り方を見てもらって指導を受ける。
ある程度良くなったところで合格をもらい、おっちゃんたちが耕している反対側から耕していくようにと指示をもらった。

実際に作業に入ると、これがなかなか楽しい。
大人たちの真似をして指定された小さな範囲を耕すのだが、俺は普通の子どもとは違い体は子ども中身は（略）なので闇雲に振り回すなんてことはしない。
一つ一つ大人たちを見て確認しながらクワを振り、持つ位置や足の配置、土に差し込む角度など、基本の姿勢から自分なりに工夫して作業をやっていく。

まず足を広げて膝を曲げ、腰を落とす、右足を前に出した状態で身体も半身に。クワを振り上げ、目的の場所に一気に振り下ろす。
振り下ろされたクワはザクッという小気味よい音とともに木の刃先を3分の1ほどが地面の中に埋まった。
最初は刃先がグルンと半回転してクワの裏で地面を叩いていたのを考えると格段の進歩ではないだろうか。
そんな事を考えつつ作業をしていると、次第にクワが土をかき分ける感触がわかるようになった。
良い感触と悪い感触を比べて振りおろし方を変えてみたり、体重をうまく乗せれないかいろいろ試してみたりしているとあっという間に時間は過ぎた。

「シラタキ君、ちょっと休憩しようか」
「あ、はい！」

夢中になって耕していると、ギルバートさんの呼ぶ声に我に返って振り返る。すると、何人かのおっちゃん達がこっちを見ていた。
ただ見ているだけ、というのではない。なにか見定めるような真剣な眼差しだった。

（な、なんでこんなに見られているんだ。）
ちょっとやりすぎたか？　確かにこんな肉体労働は子どもはあまりやりたがらないかもしれないが……。
いやいやまだ体を動かすのが好きな子ども程度で収まるはずだ…そうに違いない…。

「シラタキ君楽しそうに作業するからびっくりしたよ。
それにクワの使い方がどんどん上手くなっていくからみんなと一緒に見物しちゃったよ」
「あ、ありがとうございます！」

セーフ！見物されていただけらしい。
ちょっとそれだけとは思えないほど真剣な感じだったけどそういうものだとして納得しておこう。
下手に追及してこれ以上変な子になるのは避けたい！

まぁ、ほめられるのはやぶさかでも無いんだけどね。

「あ、でももうちょっと耕すときに前を見た方がいいかな。
耕してたところが曲がってるから、今日はいいけどこれから大変だよ？」

そう言われて自分が耕したところを見てみると、なるほど、耕したところがだんだん曲がって行ってるのが良くわかる。
「こうやるといいよ」と実演してくれるギルバートさん。
その動きを真似してやってみると、「うまいうまい」とほめてもらえた。
やったのは前を見るようにしただけなのだが、なんだかかなりう

れしい
こんな些細なことで喜んでいただろうか？
これが噂に聞く、精神が肉体に引っ張られるということなのだろうか。
悪い気はしない。
これは楽しくやっていけそうだ。

その後、見物していたおっちゃんたちに頭をガシガシと撫でられたりもみくちゃにされながら昼食と休憩をとり、午後はクワを振ることなくおっちゃんたちの応援となった。

なぜ午後は応援かというと、俺が午前中に自分の体のことを考えずはしゃいでクワを振り続けた結果、休憩が終わるころには夢の世界へと旅立ってしまい、起きた後は体の使い過ぎで動けないというなんともな有様だったからである。
力が弱いだけじゃなくて体力自体がない、という現実に俺は愕然としたのだった。

太陽が傾き始めたころ、仕事は終わって解散となった。
紫色に染まる空と赤く染まる村は綺麗で、中でも巨樹はその葉で陽光をはじきながらきらきらと輝いて見えた。

「今日は楽しかったかい？」
「うん、畑のお仕事があんなに楽しいなんて思わなかった！」
ギルバートさんと農場から帰る道すがら、そんな会話を交わしていた。

「それはよかった。これからもっと大変になるけど、シラタキなら大丈夫だね」
「任せて！俺どんどんやっちゃうから！」

ニコニコと笑うギルバートさんに嬉々として答える。
正直なところ、農業はどこか古臭いイメージで馬鹿にしていたところもあったのだが、自分で体験するということの何と大切なことか。
百聞は一見に如かずとは良く言ったものだと、そう思う。
これから少しずつ作業がきつくなっていくのだろうが、俺はそんなことは気にならないほどこの先が楽しみになっていた。
明日はなにができるのだろうかと、今から楽しみで仕方がないくらいだ。

「お、着いたね。シラタキ、ちょっとここで待っててね」
「？うん」

そういうとギルバートさんは家の中に入って行く。
しばらくギルバートさんが入って行った家の中を眺めていたが、ふと周りに視線を向ける。
夕日に照らされる村は、赤みがかったオレンジの夕陽と影の黒の二色に染められ、道行く人も家に帰ろうと足早に通り過ぎていく。
行きかう人にはそれぞれ家があって、そこには家族がいるのだろう。
家族、両親の顔が浮かんでくる。
前の両親の顔と今の両親の顔が浮かんできて軽く混乱したが、今は両方ともそばにいない。
そんな事を考えたときに、ふと自分がこの世界で一人ぼっちになってしまったような気がした。
空の紫はいつの間にか赤く、紅く染まり。俺の体から伸びる影は

より一層濃くなっていく。
よくわからない不安が、俺の体を縛りつけていく。
まるで赤と黒の世界に閉じ込められたような。
こみ上げる恐怖に視界が歪む。
足下から伸びる影は形を歪ませ、まるで捕まえに来た何かのように見えた。
ゆがむ視界の中、赤と黒がごちゃごちゃに混ざりあった世界で、背中から受ける夕日はまるで今朝見た夢の――

「おまたせ」
その声とともに頭に何かがかぶせられた。
バッと音がしそうな勢いで振り向くと、こちらに手を伸ばしたギルバートさんのニコニコとした顔が歪んだ視界の中になぜかはっきりと見えた気がした。

「うーん、不安にさせちゃったかな。ごめんね、すぐ見つかると思ったんだけどどこにしまったかわからなくなっちゃって」
そう言って俺の頭の上にあったものを取り、こちらに差し出してきた。
それは麦わら帽子。
今ギルバートさんがうなじに垂らすものよりは小さいが、子どもにはちょうどいいだろう大きさのそれだった。

「これ僕のお下がりになっちゃうけど、今日頑張ったシラタキにご褒美をあげようと思ってね」

はい、という声とともに差し出された麦わら帽子をじっと見る。
恐る恐る手にとってみれば、それは何の変哲もない麦わら帽子だったけれど、なぜだかとてもうれしかった。

「それじゃ、シラタキの家まで一緒に行こう」
手をつないで帰る道に、不安はどこにもいなかった。

「でもまさかシラタキが一人で待ってるのが怖かったとは思わなかったよ」
「そんなことないよ！全然怖くなかったし！」
「あれー、泣きそうになってたのはだれだろうねー」
「な、泣きそうになんてなってない！」
「そうだよねー、泣きそうになってないよねー」
「そ、そうだよ、やっとわかった？」
「泣きそうじゃないもんね、泣いてたもんね」
「泣いてない！」
「目が赤くなってるけど？」
「ゆ、夕日のせいだから！」
「おや、それじゃぁ明日からは一人で帰れるかな～？」
「当たり前だろ！そんなの当たり前だよ！」
「そうかそうかー、シラタキはすごいねー」
「信じてないだろ！絶対に一人で帰れるからな！」

その後、たまーに一緒に帰ってもらったのはここだけの秘密である。
これも精神は肉体に引っ張られるということなのだろうか。不覚！

1―5（後書き）

ギルバートはちょっと意地悪だ！

という今回のお話。

小さい頃って良くわからんことで嬉しくなったり怖くなったりしてたなぁ、という思い出を引っ張り出して書いてました。

メインは前半の、転生にありがちな「子どもとは思えない成長」の部分だったはずなのに、なぜか書いてて一番楽しかったのはシラタキが涙ぐむ場面。

子どもってかわいいですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7084v/

アイルーライフ

2012年1月9日00時49分発行